

法政大學講義録

田中, 遜 / 塚田, 達二郎 / 鈴木, 英太郎 / 清水, 澄 / 中
村, 進午 / 山崎, 覺次郎 / 梅, 謙次郎

(出版者 / Publisher)

法政大學

(巻 / Volume)

1-14

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

49

(発行年 / Year)

1904-02-23



（明治三十六年十月十二日第三種郵便物認可）
每月十四日、十五日、十八日、廿一日、廿五日、廿八日發行

三十七年度

明治三十七年二月二十三日發行

第一學年ノ十四

法政大學講義錄

第四拾壹號



法政大學發行

第一學年第十四號目次

憲	法 (至六七)	法學士 清水 澄
民法總則	自第一章 (至二七五) 至第三章 (至二九二)	法學博士 梅 謙次郎
民法總則	自第四章 (至二〇九) 至第六章 (至二〇六)	法學士 鈴木 英太郎
民法物權	自第一章 (至五七) 至第六章 (至六八)	法學士 塚田 達二郎
國際公法 (平時)	(至九七)	法學博士 中村 進午
經濟學	(至二二八)	法學士 山崎 覺次郎
羅馬法	(至三二九)	法學士 田中 遜

雜報

○講師招聘○海牙常設仲裁裁判所初頭ノ判決○戰時禁制品ニ關スル訓令○懸賞討論會問題

(正誤 梅博士民法總則二六三頁二行及七八行憲法ノ下第六行)

090
1904
1-1-14

第二 消極的效果

領土最高權ノ消極的效果トハ其領土内ニ外國ノ統治權ノ侵入スルコトヲ全ク排斥スルヲ稱スルナリ即チ他國ノ統治權ノ來ルコトヲ許ササルモノヲ稱ス故ニ外國ノ法令ハ勿論司法權及ヒ行政權ハ全ク此領土ニ於テ活動スルコトヲ得サルモノトス之ニ例外ナル場合ハ領事裁判ノ制度ヲ設ケアルトキ是ナリ領事裁判ノ制度トハ外國ノ領事カ自國ノ國民ニ關スル刑事及ヒ民事ノ裁判ヲ爲スコトヲ稱スルナリ我國ニ於テモ條約改正ニ至ルマテ此制度ヲ目撃シタルモノニテ現ニ我領事ハ支那朝鮮及ヒ暹羅國ニ於テ此裁判權ヲ行フナリ

第二節 領土變更

第一款 領土變更ノ手續

領土ハ之ヲ分割スルヲ得スト稱ヘ又之ヲ憲法若クハ皇室王室ノ家法ニ於テ規定シタルコトアリシモ今日ハ一般ニ必要ニ應シ領土モ分割シ得ルモノナリト稱フルコトト爲レリ併シ其領土ヲ分割讓與シ或ハ領土ヲ他ヨリ取得スルニ付

憲法 統治權ノ考證 領土 領土變更

テ其手續各國一ナラサルナリ之ヲ大別スルトキハ領土ヲ變更スルニ左ノ手續ヲ執ルモノトス

第一 領土ヲ變更スルニ憲法ノ變更ヲ爲スモノ

第二 領土ヲ變更スルニ法律ノ發布ヲ要スルモノ

第三 領土ヲ變更スルニ議會ノ協贊ヲ要スルモノ

右第一ノ憲法ノ改正ヲ要スルハ憲法ニ領土ノ範圍ヲ明カニ定メタル國ニ於テ採用スルノ制ニシテ獨逸ハ其著シキ例ナリ第二ノ領土ヲ變更スルニ法律ノ發布ヲ要シ或ハ議會ノ協贊ヲ要スルハ總テ其憲法ニ於テ此ノ如キ明文ヲ有スルヨリ來レルモノナリ併シ我國ニ於テハ憲法ノ明文ニ此ノ如キ領土變更ノ手續ヲ規定シタルモノナク又領土ノ範圍ヲ法律ヲ以テ明カニ定メサルニ由リ右ノ三種ノ手續ハ我國ニ於テ必要ナラサルモノナリト斷定シ得ルナリ即チ我國ニ於テハ天皇單獨ニ其自由意思ヲ以テ管ニ他ヨリ新領土ヲ取得シ得ルノミナラス他ニ其領土ヲ割讓スルコトヲモ爲シ得ルモノトス

第二款 領土變更ノ結果

領土ノ割讓ハ統治權ノ割讓ナリト考ヘタル時代アラシモ今日ニ於テハ此ノ如キ思想行ハルルコトナク馬關條約ニ於テ主權ノ割讓ナル文字ヲ用ヒタルコトアリシモ是レ誤レルモノトス

第一項 領土變更ノ國籍ニ及ホス結果

領土變更ト共ニ國籍ハ必ズ變更スルモノト考ヘタル時代ハ十八世紀ノ終マテ繼續シタリキ而シテ其思想ノ基ク所ハ土地ト人民トハ相附著シテ離ルヘカラサルモノナリトノ封建時代ノ遺想ヨリ來リシモノナリ然ルニ第十九世紀ニ至リ領土變更ノ當然ノ結果トシテ國籍ノ變更ヲ來スハ不當ナルコトヲ認メ領土ノ變更ヲ爲ストキハ其變更ノ領土内ニ在留スル人民ニ國籍ノ選擇權ヲ與フルコトト爲レリ固ヨリ其選擇ノ期限及ヒ選擇ノ效果等ニ至リテハ一ナラナリシモ選擇權ヲ與フルニ至リテハ領土變更ノ各條約殆ト其軌ヲ一ニシタルモノナ

ヲシナリ我千島樺太ノ交換條約及ヒ明治二十八年ノ馬關條約ニ於テモ亦此國籍ノ選擇權ヲ規定セリ故ニ今日ハ領土變更ノ結果トシテ當然其國籍ノ變更ヲ生セサルモノト爲レリ

第二項 領土變更ノ法令ニ及ホス效果

第一 領土増加ノ場合

(一) 法令ニ施行區域ヲ明定シタル場合 此場合ニ於テハ此等ノ法律命令ハ新領土ニ對シ其效力ヲ及ホサス若シ新領土ニ對シ其法令ノ效力ヲ及ホサントスルトキハ特別ノ明文ヲ要スルモノトス

(二) 法令ニ施行區域ヲ明定セサル場合 施行區域ノ明記ナキ法令ハ新領土ニ對シテモ當然其效力ヲ及ホスモノトス何トナレハ施行區域ノ明記ナキハ全國ニ其效力ヲ及ホスコトヲ前提トシテ發布シタルモノニシテ新領土モ亦領土ノ中ニ屬スレハナリ

第二 領土減少ノ場合

論士變更ノ效果

此場合ニ於テハ法令ニ施行區域ノ明記アルト否トヲ問ハス他ニ割讓セラレタル領土ニ對シテハ其法令ノ效力ヲ及ホササルモノトス

第二章 臣民

第一節 一國籍

第一款 國籍ノ性質

國籍ノ性質ニ付テハ或ハ之ヲ權利ト爲シ或ハ之ヲ義務ト爲ス者ナキニ非スト雖モ是レ誤レリ國籍ヲ權利ナリト説ク人ハ曰ク國籍ハ一ノ權利ニシテ種種ノ權利義務之ヨリ生スト又之ヲ義務ナリト説ク人ハ曰ク國籍ハ國民ノ包括義務ナリト然レトモ國籍ヲ有スルノ結果トシテ之ニ伴ヒ種種ノ權利義務生スト雖モ國籍其モノハ權利ニ非ス又義務ニ非サルナリ然ラハ國籍トハ如何ナルモノナリヤト云フニ國籍トハ單ニ一ノ身分ニ過キサルノミ或ハ國籍ハ國民タルノ權利義務ノ關係ニ付キ或ハ國籍ハ一ノ事實ナルカ故ニ之ヨリ一定ノ權利義務生スルコトナシ或ハ國籍ヨリ直接ニ生スルハ義務ニシテ權利ハ間接ニ生スト

説ク人アリト雖モ畢竟觀察點ノ異ナルニ過キス國民ニ伴フノ權利義務アリテ
其國民タルノ身分ハ國籍ノ取得ニ因ルモノナレハ國籍ヨリ直接ニ權利義務隨
伴シテ生スト云フモ誤ナシト信スルナリ

第二款 國籍ノ取得

我憲法第十八條ニ曰ク日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ルト故ニ憲
法上國籍取得ノ要件ハ君主ノ大權ニ由ルヲ得ス必ス法律ヲ以テ定メタルヘカ
ラサルモノトス面シテ之ニ關スル現行ノ法律ヲ明治三十二年發布ノ國籍法ト
爲ス今此法律ニ依リテ我國籍取得ノ原因ヲ左ニ説明セン

第一項 出生

出生ヲ以テ國籍取得ノ原因ト爲スハ何レノ國モ同シト雖モ之ニ關シテハ二箇
ノ異ナリタル制度アリ其一ヲ血統主義ト名ケ他ヲ領土主義ト名ケ血統主義ト
ハ何レノ國ノ領土ニ於テ生ルルモ其親ノ血統ニ從ヒテ總テ其國籍ヲ定メント

スルノ主義ヲ指スモノニシテ領土主義トハ血統ノ如何ヲ問ハス凡テ自國ノ領
土内ニ生レタル者ハ之ヲ自國ノ國臣ト爲スノ主義ヲ云フナリ然ルニ此二箇ノ
主義ノ絕對ノ適用ハ各缺點アルコトヲ免ルル能コトハス即チ領土主義ヲ絕對
ニ用フルトキハ人情ニ背キ又血統主義ヲ絕對ニ用フルトキハ無籍ノ國民ヲ生
スルノ虞アリ若シ又各國ノ間ニ一ハ領土主義ヲ用ヒ他ハ血統主義ヲ用フルト
キハ國籍ノ重複ヲ生スルノ虞ナキニ非サルナリ故ニ我國ハ原則トシテ血統主
義ヲ採リ之ニ領土主義ヲ併セ用フルコトト爲セリ尙ホ場合ヲ分チテ之ヲ述フ
ルトキハ

第一 出生ノ時父日本人ナルトキハ其子日本人ナリ出生前ニ父日本人トシテ
死亡シタルトキモ亦同シ若シ出生前ニ父離婚若クハ離縁ニ因リテ日本ノ國籍
ヲ喪ヒタルトキハ懐胎ノ初ニ遡リテ其子ノ國籍ヲ定ムルモノトス

第二 父不明ナルトキ又ハ父無籍ナルトキ母ニシテ日本人ナレハ其子ハ我國
籍ヲ有スルモノト爲ス

(三) 父母共ニ不明ナルトキ又ハ共ニ無籍ナルトキハ日本ノ領土内ニ於テ生レ

タル子ヲ日本人ト爲スルハ其ノ父ハ其ノ母ニ依リテ認知セラルタルモノハ我國籍ヲ有スルコトト爲

第二項 認知

日本人タル父又ハ母ニ依リテ認知セラレタルモノハ我國籍ヲ有スルコトト爲ルナリ然レトモ認知ニ因リテ我國籍ヲ得ルニハ左ノ要件ヲ備フルヲ必要ト爲

スナリトシ

一 其子本國法ニ依リテ未成年者タルコト

二 對外國人ノ妻ニ非サルコト

三 父母ノ中先ニ認知シタル者日本人ナルコト

四 父母同時ニ認知シタル場合ニハ父日本人ナルコト

第三項 婚姻及ヒ縁組

婚姻及ヒ縁組ニ因リテ我國籍ヲ得ル場合ヲ舉クレハ其ノ一人ハ日本國ノ國民ニシテ

一 第一外國ノ婦人カ日本ノ男子ニ嫁シタルトキ

二 第二外國ノ男子カ日本ノ婦人ノ入夫ト爲リシトキ

三 第三外國ノ人カ日本ノ養子ト爲リシトキ

四 第四法律第二十一號ノ特別ノ要件ヲ定ム即チ左ノ如シ果ハ其ノ要件ニシテハ

一 品行方正ナルコト

二 婚引續キ一年以上日本ニ住所又ハ居所ヲ有スルコト

三 內務大臣ノ許可ヲ經ルコト

尙ホ婚姻及ヒ縁組ニ付テハ法例第三條第十三條及ヒ第十九條ヲ參照スヘシ

第四項 歸化

歸化トハ處分行爲ニ依リ國籍ヲ取得セシムルコトヲ謂フ而シテ歸化ニ因リ國

籍ヲ取得スルニハ左ノ要件ヲ備フルコトヲ必要トスルナリ

第一 引續キ五年以上日本ニ住所ヲ有シタルコト

第二 滿二十歳以上ニシテ本國法ニ從ヒ能力ヲ有スルコト

第三 滿二十歳以上ニシテ本國法ニ從ヒ能力ヲ有スルコト

第四 品行方正ナルコト

第五 內務大臣ノ許可ヲ經ルコト

尙ホ婚姻及ヒ縁組ニ付テハ法例第三條第十三條及ヒ第十九條ヲ參照スヘシ

又ハ其ノ要件ニシテハ

一 品行方正ナルコト

二 婚引續キ一年以上日本ニ住所又ハ居所ヲ有スルコト

三 內務大臣ノ許可ヲ經ルコト

尙ホ婚姻及ヒ縁組ニ付テハ法例第三條第十三條及ヒ第十九條ヲ參照スヘシ

又ハ其ノ要件ニシテハ

一 品行方正ナルコト

二 婚引續キ一年以上日本ニ住所又ハ居所ヲ有スルコト

三 內務大臣ノ許可ヲ經ルコト

第三 品行方正ナルコト
第四 獨立ノ生計ヲ營ムニ足ルベキ資産又ハ技能ヲ有スルコト

第五 現ニ何レノ國籍モ有セス又ハ國籍ヲ有スルモ我國籍ヲ取得スルコト
以上ノ五要件ハ普通ノ歸化ニ付キ必要ナルモノナリト雖モ日本人タル父若クハ母ヲ有スル者ニシテ現ニ我國ニ住所ヲ有スル者ニ限リテハ右ニ舉ケタル第一第二及ヒ第四ノ要件ヲ具フルヲ必要ナラズトセリ
歸化ヲ許可シタルトキハ通常之ヲ官報ニ告示スト雖モ歸化ノ效力發生ノ時期ハ官報ニ告示シタル時ニ非スシテ歸化ノ許可ヲ與ヘタル時ニ存ス而シテ我國ニ於テ許可ヲ與フルノ權限ヲ有スル者ハ內務大臣ナリ

又國籍法ハ本國法ニ於テ反對ノ規定ナキ限ハ歸化ノ效果ハ其妻及ヒ子ニ及フモノト爲セリ
終ニ歸化ニ關シ一言スヘキハ歸化ノ性質ナリ歸化ハ官吏ノ任命鐵道ノ特許等ト同シク公法上ノ契約ナリト唱フル者アリト雖モ契約トハ民法上ノ觀念ニシ

テ公法ノ範圍ニ於テ契約ヲ認ムルハ其當ヲ得ス殊ニ歸化ハ合意ニ因リテ其效力ヲ發生スルモノニ非ス內務大臣方權力的ニ許可ヲ與フルニ因リテ始メテ其效力ヲ生スルモノナルヲ以テ普通ニ許可若クハ認可ト等シク一方の行爲ニシテ出願者ノ意思ヲ條件トシテ發スル命令ナリト論スルヲ至當ナリト信スナリ故ニ歸化ノ要件ヲ具備シタルモノニ對シテ內務大臣ハ必ス其歸化ヲ許スノ義務ナク之ヲ許可スルト否トハ全ク其自由ニ屬スルモノナリ

第五項 國籍ノ回復

國籍ノ回復ハ生來日本人タリシ者カ其國籍ヲ喪ヒタル後再ヒ我國籍ヲ取得スルコトヲ謂フ故ニ歸化人若クハ歸化人ノ子ニシテ我國籍ヲ得タル者又ハ我國民ノ養子又ハ入夫ト爲リタルニ因リ我國籍ヲ得タル者ノ如キハ生來ノ日本人ナラサルニ由リ一旦我國籍ヲ喪ヒタル後ハ國籍回復ノ方法ニ依リテ再ヒ我國籍ヲ得ルコトヲ得ス再ヒ我國籍ヲ得ルニハ必ス歸化ニ依ラサルヲ得サルナリ國籍ノ回復モ歸化ト同シク內務大臣ノ許可ヲ要スルモノナレトモ兩者ノ間ニ

其要件ニ關シテ大ニ輕重ノ別アリ即チ國籍ノ回復ハ其要件甚ク簡易ナリ例ヘハ外國人ニ婚姻シタルカ爲メ我國籍ヲ喪ヒタル者カ國籍回復ヲ爲サントスルトキハ婚姻解消後日本ニ住所ヲ有スルコトヲ以テ唯一ノ要件ト爲シ外國ニ歸化シタルカ爲メ我國籍ヲ喪ヒタル者再ヒ我國籍ヲ回復セントスルトキハ單ニ其要件トシテ日本領土内ニ住所ヲ有スルコトヲ必要トスルカ如キ是ナリ

第六項 勅裁

我國ニ特別ニ功勞アル外國人ニ限リテ之ニ對シ特別ニ勅裁ヲ經テ我國籍ヲ與フルコトアリ(國籍法第一一條) 全ク其自由ニ歸スルカキレニシテ其國籍ノ變更ハ其國籍ノ選擇ニ依リテ我國國民ト爲リタルカ如キ是ナリ

第七項 國籍ノ選擇

領土變更ノ場合ニ於テハ其變更セラルヘキ領土内ニ住居スル國民ニ對シ一般ニ國籍ノ選擇權ヲ與スルヲ常トス我最近ノ例ハ臺灣ニ住居シタル清國人カ我國籍ヲ選擇スルニ依リテ我國國民ト爲リタルカ如キ是ナリ

律ハ出來タモノデアラウ若シ然ラズトセバ是ガ帝國議會ノ協贊ヲ經テ總テ法律ト同シ形式ヲ以テ定メラル管ガナイ何トナレバ帝國議會ハ憲法ノ範圍内ニシカ行動スルモノデナイ若シ臺灣ガ憲法ノ範圍外デアルト云フナラバ帝國議會ニ於テ臺灣ノ法律ニ關スル事柄ヲ議スベキ管ガナイ殊ニ臺灣總督ガ法律ニ均シイ命令ヲ發スルコトガ出來ルトカ出來ストカ云フコトヲ議會デ以テ議スベキ管ガナイ若シ憲法以外デアルナラバ天皇ガ勝手ニ御定メニナラ宜シイ譯デアアル又内地ノ法律ヲ特ニ勅令ヲ以テ臺灣ニ施行セラレナイ限ハ臺灣ニハ適用セラレスト云フヤウナコトヲ憲法律デ以テ極メル必要ガナイ何トナレバ臺灣ガ憲法以外ノ土地デアルナラバ憲法ニ從ウテ定メタル法律ハ臺灣ニ行ハルベキ管ガナイカラ態態ソナコトヲ言ハスデモ宜イ故ニ此明治二十九

年ノ法律第六十三號ト云フモノガ出タトキニハ我我ハ臺灣ニ關スル憲法問題ハ政府ニ於テハ既ニ決定セラレタモノデアルト思ヒヤシタノニ圖ラザリキ明治三十年ノ冬ニナラ此問題ガ再起タ高野高等法院長ノ免官ニ牽連シテ此問題ガ起ツタ高野ト云フ人ニ對シテ私ハ今何等ノ意見ヲ言フ必要モナシ又言フ

〇トモ出来ルモエガ併ナガラ憲法問題トシテハ當時私ハ臺灣ニハ既ニ憲法ガ
 行ハレテ居ルト云フ意見デアッタ幸ニ其後政府ハ我我ノ意見ヲ採用致シマシタ
 ガ、其事ハ公ニハナラズニ終ツタノデアリマス、併シ學者トシテハ今日尙ホ臺灣
 ニハ憲法ガ行ハレヌト云フ説ヲ唱ヘル者ガアル私ハ其説ノ據リ所ノ甚ダ薄弱
 ナルコトヲ信ジテ居リマスケレドモサウ云フ説モマダアルト云フコトダケ申
 上ゲテ置カキバナラヌ、是ガ憲法ニ關スル維新後ノ我邦ノ法律ノ有様デアリマ
 ス、
 次ニ維新後ノ法律ノ第二ノ種類、行政法ト云ヘバ其範圍
 極メテ廣イノデアアル、其全般ニ涉ル御話ヲ致ス譯ニハ固ヨリ參リマセヌガ、其
 中デ中央官衙及ビ地方官廳若クハ地方團體式ケ要スルニ國及ビ國ノ一部ノ組
 織ノ事式ケヲ御話致サウト思フ、先ヅ第一ニ中央ノ官制ノ御話ヲ致シマス、是ハ
 明治元年二月三職八局ノ職制ト云フモノガ出来マシタ、即チ三職ト云フノハ總
 裁職、議定職、並ニ參與職、八局ト云フノハ總裁局、神祇事務局、內國事務局、外國事務
 局、軍防事務局、會計事務局、刑法律事務局、制度事務局、此八局ガ丁度今ノ内閣及ビ諸

省ニ當ル、斯ウ云フモノガ出来マシタガ、其後明治二年七月ニ職員令ト云フモノ
 ガ出マシテ、之ニ二官六省ト云ヒマシテ詰リ只今ノモノガ聊カ名ノ變ラタマデヌ
 モノデアアル、其後官制ハ屢ニ變遷ヲ經マシタケレドモ、中デ最モ著シイ變遷ハ明
 治十八年十二月ニ内閣組織ト云フモノガ出来マシタノデアアル、從來ハ太政大臣
 左大臣右大臣ト云フモノガアツテ其下ニ參議、並ニ各省ノ郷ト云フモノガアツテ、
 政府ノ中心ガ何處ニ在ルカ稍ヤ不明デアッタ、ソレガ此十八年ニ内閣組織ト云
 フモノニナツテ形ハ立憲政體ノ國國ト同シヤウニ政府ノ組織ガ出来タ、今日ノ
 内閣組織モ當時定マデ通リデアアル、間デ一時拓殖務省ナドト云フモノガ出来タリ
 何カ致シマシタガ、併ナガラ今日ハ大體十八年ノ組織ノ通リデアアル、而シテ現行
 ノ各省官制ハ近頃小改正ガアリマシタケレドモ詰リ三十三年四月ノ各省官制
 ト云フモノガ最後ノ官制デアアル、第二ニハ地方制度ト云フモノ、其第一ハ府縣ト
 云フモノハ明治ノ初ニハ藩治職制ト申シマシテ、明治元年ノ十月ニ定メラレタ
 モノガ抑モ府縣ノ制度ノ初デアアル、細カイ事ハ固ヨリ御話致シマセヌケレドモ
 ソレニハ斯ウ云フコトニナツテ居ル、當時布告ノ前書ニ諸藩ニ對シテ、天下地方

府藩縣之三治ニ歸シ三治一致ニシテ御國体可相立然ルニ藩治之儀ハ從前各其家之立ルニ隨ヒ職制區區異同有之候ニ付今後一般同軌之御趣意ヲ以テ藩治職制大凡別紙之通可相立旨被_レ仰出候事ト斯ウアツテ、執_レ政_レ公_レ議_レ人_レト云フヤウナモノガ出來タ、此時ニ當テハ御承知デアリマセウケレドモ、詰リ從來ノ大名ヲ其儘ニ藩知事ト致シマシテ、サウシテ表向ハ朝廷ノ官吏デアルケレドモ其實ハ從來ノ儘デアツタ、ソレガ第二段ニ於テハ明治四年七月ノ廢藩置縣ガ行ハレタ、此廢藩置縣ト云フコトハ實ニ今日考ヘテ見ルト如何ニシテ行ハレタカト云フコトガ始ド不思議デアル、我我日本人デサヘモ其ヤクニ思フ位デスカラ外國人ハ此廢藩置縣ガ無事ニ殆ド突然ニ行ハレタト云フコトヲドウシテモ了解スルコトガ出來ヌト申シマス、併シ物ニ原因ガナクテ結果ノアル筈ハアリマセヌカラ矢張り廢藩置縣ガ容易ク行ハルベキ原因ガアツタト謂ハナケレバナラヌ、是ハ歷史上ノ一大問題デアラウト思ヒマスケレドモ私ノ思フニハ當時純然タル勤王ノ志ヲ以テ皇室自ラ天下ノ政治ヲ御執リニナルノガ至當デアルト考ヘタ人モアリマセウケレドモ、ナカナカサウ云フ一片ノ道理式ケデ天下ノ仕事ヲス

ルコトノ出來ルモノデナイカラ、ソレニハ必ズ利害問題ガ伴ウテ居ル、ソレハ例デアルカト云フニ徳川幕府ヲ倒シテソレニ代ルモノガアツタラバ或ハ廢藩置縣ハ行ハレナカッタカモ知レス、所ガ當時ノ事情、到底徳川幕府ニ代ル人ハナカッタ、即チ第二ノ徳川家康ト云フ者ハ當時ナカッタ、ソレ故ニ強ヒテ或藩主ガ徳川幕府ノ如キコトヲシヤウト思フテモ他ノ大名ガ之ヲ許サヌ、スレバ必ズ戰サニモナラウシ、戰サニナツタ結果ガドウナルカ、日本全國ノ大亂ヲ醸シテ其結果誰ガ利益ヲ受クルカ、誰モ利益ヲ受ケナイカモ分ラヌ、ソレ故ニ寧ろ廢藩置縣ニナラテ仕舞_レタ方ガ總テノ大名皆平等ニ朝廷ノ直接ノ家來ト云フコトニナルカラ宜カラウト云フ利害カラ割出シテ廢藩置縣論ガ勝ヲ制シタノデアラウト思フ(中ニハ世界ノ大勢ヲ遠觀シテ之ヲ主張シテ識者モアツタラウケレドモ是ハ當時極メテ少數デアッタラウト思フ、表面ハ誰モ言ハナカッタカモ知レスガ、内心ニ於テハサウ云フコトガ多分理由トナツタノデアラウト思フ、ソコカラシテ當時廢藩置縣ニナツタ方ガ宜シイト廢藩ノ建議ヲシタ藩ガ少クナイ、ソレ等ノ藩ハサウ云フ理由ニ基イタモノデアラウト私ハ思フ、ソレデ存外是ガ容易ク行ハレタモノト

私ハ考ヘテ居ル、其當時即チ明治四年七月十四日ニ詔書ガ出マシタ、朕惟フニ更始ノ時ニ際シ内以テ億兆ヲ保安シ外以テ萬國ト對峙セント欲セハ宜ク名實相副ヒ政令一ニ歸セシムヘシ朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聽納シ新ニ知藩事ヲ命シ各其職ヲ奉セシム然ルニ數百年因襲ノ久キ或ハ其名アリテ其實舉ラサル者アリ何ヲ以テ億兆ヲ保安シ萬國ト對峙スルヲ得ンヤ朕深ク之ヲ慨ス仍テ今更ニ藩ヲ廢シ縣ト爲ス是務ヲ冗ヲ去リ簡ニ就キ有名無實ノ弊ヲ除キ政令多岐ノ憂無ラシメントス汝群臣其レ朕カ意ヲ体セヨト斯ウ云フ御言葉デアアタ、ソレハ此間ニ在京ノ知藩事ヲ召サレテ御前ニ於テ免官ノ御達シガアタ、ソレカラ翌十五日ニ在藩ノ知事名代トシテ在京ノ參事ヲ召サレテ同様ノ御達シガアタ、此ノ如クシテ廢藩置縣ハ行ハレマシタ、今日ノ府縣ノ制度ト云フモノハ詰リ是ガ基礎デアアル、尙ホ明治十一年七月ニ至ツテハ府縣會ト云フモノガ開設セラレマシタ地方ノ行政ヲ官ニ於テ專ニスルト云フコトヲ廢メテ府縣會ニ諮ラテ定メルコトニシ、就中府縣ノ財政ハ府縣會ニ於テ總テ定メテ行タト云フ方針ヲ取リマシタ、ソレカラ今日ニ繼續シテ居ルノデアアル、但制度ト致シマシテハ當時ハ甚ダ不

完全デアアリマシタカラ明治二十三年五月ニ至ツテ府縣制ト云フモノガ出來マシタ、尙ホ是ハ三十二年三月ニ改正セラレテ現行法ハ三十二年ノモノデアアル、此府縣制ノ中ニ府縣ノ行政ニ關スルコトハ總テ網羅セラレテ居ル尤モ府縣判事ガ中央政府ノ代表者トシテ行フベキ職務ハ地方官制ニ定メテアル、第二ニハ部、此部ト云フモノガ行政區畫トシテ出來マシタ、明治十一年ノ七月ニ郡區町村編制法ト云フモノガ出來タノガ始デアアル、ソレハ簡單ナモノデアアリマスカラテコト話シマスガ、當時ノ太政官第十七號布告デアリマス、郡區町村編制法左ノ通り定メラレ候條此旨布告候事、第一條 地方ヲ畫シテ府縣ノ下郡區町村トス、第二條 郡町村ノ區域名稱ハ總テ舊ニ依ル、第三條 郡ノ區域廣濶ニ過キ施政ニ不便ナル者ハ一郡ヲ畫シテ數郡トナス、第四條 三府五港其他人民幅濶ノ地ハ別ニ一區トナシ其廣濶ナル者ハ區分シテ數區トナス、第五條 每郡ニ郡長各一員ヲ置キ每區ニ區長各一員ヲ置ク郡ノ狹少ナルモノハ數郡ニ一員ヲ置クコトヲ得、第六條 每町村ニ戶長各一員ヲ置ク又數町村ニ一員ヲ置クコトヲ得、但區内ノ町村ハ區長ヲ以テ戶長ノ事務ヲ兼スルコトヲ得、アトカラ追加ガアリマシ

タケレドモ、當時出タノハ是丈ケ、此ヲ如クニシテ郡ト云フモノガノ行政區畫トシテ認メラレタモノデアル、併ナガラ之ニ關スル法令ハ極メテ不備デアラ、後ニ三箇條追加ニナリマシタケレドモソレダケテ所詮郡治ヲ十分ニ料理スルコトハ出來ナカ、タデアラウト思ヒマス、ソレデ是モ明治二十三年五月ニ郡制ト云フモノガ府縣制ト同時ニ出來マシタ、ソレデ始メテ其基礎ガ定マタ、尙ホ此郡制ハ大分改マリマシテ現行法ハ明治三十二年三月ニ出マシタ、第三ニハ市町村ト今日謂フ市町村ト云フモノハ明治四年ノ四月ニ戶籍法ト云フモノガ出來テ、其戶籍法ニ區ヲ設ケテ、其區ニ戶長ヲ置クト云フコトヲ定メラレタ、ソレガ初デゴザイマス、ソレカラ降テ明治十一年七月ニ只今朗讀致シタ郡區町村編制法ガ出來テ、是デ區及ビ町村ト云フモノガ出來タ、尙ホ明治十三年四月ニ至リマシタ區町村會法ナルモノガ出來タ、矢張り區町村モ府縣ノ如ク幾分ノ自治ヲ認メテ主トシテ區町村ノ費用ハ區町村會ニ於テ議スル、歲入歲出ヲ是デ以テ定ムルト云フコトニナラタノデアリマス、是ハ段段改正ヲ經マシテ明治二十一年四月ニ至テ茲ニ現行ノ市制町村制ト云フモノガ出來マシタ、是ニ因テ市町村ノ基礎ガ固マタ

行政法ノ御話ハ此位ニ止メテ置キマシタ、是ヨリ第三刑法ノ御話ヲ致シマス、刑法此刑法ト云フノハ廣イ意味デアリマス、ハ明治三年十二月ニ新律綱領ノ出來タノガ初メ、ソレマデハ舊慣ニ依テ一時處分シテ行ッタヤウデアアル、此新律綱領ナルモノハ大體ハ大實律ヲ基礎ト致シマシタモノデ御承知デモアルカ知リマセヌガ、大實律ナルモノハ今日缺ケテ居ル部分ガ大分多イ、ソレ故ニ之ニ明清律ヲ參考致シマシタ、缺ケテ居ル部分ノミナラズ支那デハ大實律ノ模範タル唐律ト云フモノガ段段改メラレテ、明ニハ明律アリ、清ニハ清律カアルカラソレ等ヲ參考致シマシタ、ウシテ出來タ、是ハ純然タル支那風ノ法律デアアル、然ルニ此法律デハドウモ西洋ノ文物ガ日ニ月ニ遣入テ參ル世ノ中ニ適セスト云フノデ、明治六年五月ニ至テ改定例ト云フモノガ出來マシタ、此改定律例ハ、法律ノ前ニアル上論文ト云フモノニ依ルト各國ノ定律ヲ酌ミ云云ト書イテアル、ソレデスカラ上論文ト云フモノニ依ルト餘程改テ居ラ、官ハハ歐羅巴的ニデモ出來テ居ルカノヤウニ思ハレマス、ケレドモ内容ヲ見ルト云フト決シテサウデハナイ、前ノ新律綱領ヲ聊カ修正シタニ過ギナイモノデアアル、到底此ノ如キ法律デハ日新ノ

社會ヲ支配シテ行クヨトハ出來マセヌカラ佛蘭西カラ「ボワソナード」氏ヲ招聘シテ刑法ノ起草ニ從事セシタマシテ其刑法ガ明治十三年七月ニ出來シテ十五年一月ヨリ施行セラレタデス、今日ノ法典デハ是ガ一番古イ同時ニ治罪法ナルモノガ出來マシタ、刑法ト同時ニ發布セラレ、同時ニ施行セラレタノデアアルモ矢張り「ボワソナード」氏ガ起草セラレタデアリマスガ、併シ治罪法ノ方ハ大分ボワソナード氏ノ意見ヲ用ヒオカッタ部分ガアリマス、細カイ事ハ却テ刑法ヨリモ草案ノ儘デアアルガ、併シ「ボワソナード」氏ハ陪審制ヲ採用シヤウト云ッタガ、ソレハ採用シテカッタ、ソレハ採用シテカッタ方ガ宜カッタと思フ、其結果改メナケレバナラス所ヲ改メナカッタ爲メニ言ハバ不揃ノ事ガアッタと思フ、例ヘバ重罪裁判所ノ制ト云フモノハ苟モ陪審制ヲ取ラナイナラバ殆ド理由ノナイ制デアッタ、後ニ御話ヲ致シマスル通リ其後裁判所構成法ガ施行セラレ、民事訴訟法ト云フモノガ施行セラルルニ至ラハ到底治罪法ノ儘デハ行ヒ難イ事ガ多イカラ明治二十三年十月ニ刑事訴訟法ト云フモノガ出來ラ、是ガ治罪法ニ代ッタ、ソレハ同年ノ十一月カラ施行セラレタ

第四ニハ民法、民法的ノ纏フタ規定ト云フモノハ明治八年六月第三號布告ト云フモノガ初デアラウト思フ、是ハ條數ハ餘リ多クモナク、サウシテ標題ハ裁判事務心得ト云フモノデアアル併ナガラ是ニハ民法上ノ大原則ガ掲ゲテアツテ、私ノ解スル所ニ依レバ其原則ハ今日仍ホ行ハレラ居ル、即チ其第三條ニ「民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナキモノハ條理ヲ推考シテ裁判スヘシト云フコトガアル、是ハ今日尙ホ私ハ效力ヲ存シテ居ル」ト思フ、從テ今日デモ成文ノナイ事ハ習慣ニ依ルノデアアル、唯民事ハ法例ノ第二條ニ明文ガ出來テ居リマスカラ詰リ重複ニナル、併ナガラ法例ニ依ッテ全部改メラレタモノデハナイト思フ、故ニ慣習ガナケレバ條理ヲ推考シテ裁判スル、此條理ト云フモノハ我我ノ語フ所ノ「性法若クハ理想法」デアアル、當時ノ「條理」ト云フモノモ無論其精神デアッタコトハ私ハ疑ナイト思フ、佛蘭西法ノ最モ勢力ノアツタ時代デスカラ……是ノ外ニハ切切ノ民法の規定ハマダアリマシテ、例ヘバ地所置入書入規則或ハ不動產ノ賣買ニ關スル規定若クハ不動產ノ登記ニ關スル登記法ト云フモノガアッタ、其他切切ノ法令ハ枚舉ニ遑アリマセヌガ、纏フタ原則ヲ定メタモノハ私ハ今朝

讓シテ裁判事務心得ト云フモノノ外ニハナカッタト云フテ宜カラウト思フ、下ツテ明治二十三年三月及び十月此二回ニ分テ舊民法ガ發布セラレタ、此民法ハ二十六年一月一日カラ施行セラルベキ管デアリマシタガ明治二十五年ニ此法律ノ施行ヲ延期スルト云フ法律ガ出来マシタ、ソレデ初ハ明治二十九年ノ十二月三十一日マデ施行ヲ延期スルト云フノデアッタケレドモ、ソレガ又更ニ延期セラレマシテ畢竟此民法ハ一日モ施行セラレズニ了ツタ、而シテ之ニ代ルベキ法典ハ明治二十六年以後法典調査會ナルモノヲ設ケテ起草セシメタノデアッタ、ソレガ明治二十九年四月ニ先ヅ三編丈ケ出来テ、ソレカラ三十一年六月ニアトノ二編ガ出来マシテ、是デ新民法ガ完備シタ、是ガ明治三十一年七月ノ十六日カラ施行セラレテ居ル現行ノ民法デアリマス、次ニハ法例、此法例ト云フモノハ本來民法デハアリマセヌケレドモ、最モ民法上ニ必要ノ多イモノデアルカラ此處デ申シマス、初ノ法例ハ民法ノ一部ト同時ニ二十三年十月ニ發布セラレマシテ、是ハ民法ト共ニ施行ヲ延期セラレ現行ノ法例ハ明治三十一年六月ニ出来マシタ、サウシテ民法ト共ニ施行セラレマシタ

第五ハ商法、商法ハ二十三年三月ニ舊商法ノ出来マシタノガ初デ、此商法ハ翌二十四年ノ一月一日ヨリ施行セラルベキ管デアッタ、然ルニ二十四年ノ暮ニ至テ此法律ノ施行ヲバ民法ト共ニスル方ガ宜シイト云フノデ、二十六年一月一日マデ其施行ヲ延期シタ、然ルニ二十五年ニ至テ民法ト共ニ此商法ノ施行ヲ延期スルト云フ法律ガ出来マシタ、ソレデ先ヅ一旦商法ヲ施行ト云フモノハ行ハレナカッタ、併ナガラ商法ノ中デ會社、手形及ビ破産ニ關スル部分ハ特ニ急ニ施行スル必要ガアルト云フノデ聊カ修正ヲ加ヘテ明治二十六年三月ニ其修正法律ガ出テ、サウシテ同年ノ七月一日カラ施行セラレタノデアリマス、サウシテ他ノ部分ハ法典調査會ニ於テ調査シタモノガ施行セラルルト同時ニ效力ヲ失フベキ管デアッタノデスガ、明治三十一年ノ夏ニ商法ノ改正案ガ議院ヘ出マシテ、貴族院ヲ通過シテ衆議院ノ特別委員ニ付シテアッタ所ガ其時ノ議院ガ解散ニナツテトウトウ其法律案ハ成立シナカッタ、所ガ前ノ商法ハ丁度同年ノ六月三十日マデ施行ガ延期セラレテアッタノデスカラ七月一日カラ其商法ノ會社手形及ビ破産ヲ除イタル他ノ部分ガ施行セラレナケレバナラヌヤウニナツテ居テ政府デハ新シ

イ商法ノ案ガ多分其内ニ議會ヲ通過スルデアラウト思フ居タカラ古イ商法ニ關スル延期法ト云フヤウナモノ案ハ出サナカッタ、其結果實ハ政府モ議院モ意外ノコトニナラタト云ウチ宜カラウト思フ、私ナドハ覺悟ヲシテ居タケレドモ政府一般カラ云ヘバ覺悟シテ居ラナカッタ結果ニナラタアル、ソレハドウデアアルカト云フト全ク效力ヲ生ゼシメナイ積リデアッタ舊商法ガ自ラ明治三十一年七月一日ヨリ施行セラレテ法律トシテ行ハルルト云フコトニナラタ、是ハ當時人ガ餘程驚イタモノデアッタ多少批難ノ聲モ聞キマシタケレドモ實ハ結果ガ極メテ宜カッタト云フノハ一方ニ於テハ僅カ一年バカリノ間デシタカラ其舊商法ガ施行セラレタト云フテモ殆ド有名無實格別ソレガ爲メニ後日困難ヲ感ズルヤウナ問題ハ殘ラナカッタ、日本ノ人ガモト少シ法律思想ニ富ンデ居タラバ却テ面倒ナ問題ガ起ッタカ知ラヌガ幸ニ我邦デハ舊商法ノ一時施行セラレタト云フコトヲ知ラ居ル者モ極メテ少數ダラウト思フ、其位ノコトデ實際ハ餘リ行ケレナカッタ、ソレガ丁度宜カッタ餘リ是ガ行ハレ過ギルト困ッタノデアアル、他ノ一方ニ於テ有名無實ノ施行デモ此施行ガ必要デアッタ、其譯ハ今日行ハレテ居ル所ノ各國トノ條

約ハ明治三十二年ノ七月カラ(或國トハ八月カラ行ハルル譯デアッタ)所ガ此新條約ヲ施行スルニ付テハ少クモ一年前ニ各種ノ法典ガ皆施行セラレテ居ラナケレバナラヌト云フコトニナラテ居ッタ、ソレデスカラ明治三十一年ニ舊商法ハ施行ガ延期セラレテ居リ、而シテ新高法ハ議院ノ決議ヲ經ル邊ガナカッタシタナラバ之ガ爲メニ新條約ノ施行ガ半年カ一年後レル所デアッタ、條約ノ解釋トシテハ單ニ後レル丈クデアアルカ、モット面倒ナ問題ガ起ッタカト云フコトハ當時多少ノ疑問デシタケレドモ少クモ新條約ノ施行ノ後レルト云フコトハ疑ナカッタ、所ガ此後レルト云フコトハ當時ノ我邦ノ爲メニハ非常ナ不名譽ナコトデアッタ、折角コチラカラ請求ヲシテ條約ノ改正ヲレテ僅ニ對等條約ノ締結ヲ得タト云フテ喜ンデ居ッタ、而モ各居留地ニ在留シテ居ッタ外國人ハ殆ド擧ツテ之ニ反對シタ、自分等ノ利益カラ云フト新條約ノ方ガ却テ損デアアルト考ヘタ、ソレデ極力反對スルニモ拘ハラズ漸ク條約ガ出來上ラテ施行モ最早近キニアルト云フ時ニナラテカラ法典ノ中デ商法ガ一ツ缺ケテ居ルガ爲メニ條約ガ施行セラレヌト云フコトデアッタ、國家ノ不名譽デアアル、ソレデ舊商法デモ施行セラレタタメニ翌年ノ七月

カラ新條約ヲ施行スルコトガ出来タ、ソレデ舊商法ノ一時施行セラレタト云フコトハ言ハバ怪我ノ功名デ大キニ都合ガ好カク、ソレカラ明治三十二年ノ三月ニ至テ漸ク新商法ガ法律トナツテ出マシテ、同年ノ六月十六日カラ新商法ガ施行セラレタ、尤モ舊商法ニハ破産ニ關スル規定ガアツタ所ガ此破産ニ關スル部分ハ新商法ニハナイ、此部分丈クハ舊商法ガ今日仍ホ依然トシテ行ハレテ居ル、商法ノ施行ト同時ニ二三ノ改正ヲ加ヘマシタケレドモ其丈デ今日施行セラレテ居ル、是ハ必ズ違カラザル内ニ單獨ノ破産法ト云フモノガ出テ民事、商事ニ通ズル廣イ破産法ガ出来ルコトデアラウト思ヒマス、此案ハ明治三十五年ニ既ニ公ニナツテ居ル、實ハ其後議院ニ出シテ、サウシテ其通過ヲ計ラナケレバナラス筈デアッタノデスケレドモ御承知ノ通り今頃ノ議會ハ臨時議會ノ外ハ必ズ解散サルルヤウナ有様デスガ臨時議會ニハ會期ガ短クテ出サスト云フノデ詰リマダ破産法ヲ議スル邊ガナイ、併シ今度ハ或ハ臨時議會デ之ヲ議スルヤウニナルカ、然ラズバドウゾ此次ノ通常ノ議會ニ於テハ破産法ヲ議スル邊ガアルヤウニアリタイト希望シテ居リマス

以上ニテ先ヅ商法ニ關スル御話ハ終ラタト致シマス、此次ニハ第六訴訟法ノ御話ヲ致シマス、是モ廣イ意味デ申シマス、例ヘバ裁判所構成法ナドヲ含マシテ申シマス

訴訟法ニ付テ成文ノ稍ヤ纏ツタモノガ出マシタノハ明治六年七月ガ初デ、訴答文例ト云フモノガ出タ、是ガ明治二十三年マデ行ハレテ居ッタ、民事ニ於テハ訴答文例ト云フモノガ長イ間働キヲ爲シタ、明治二十三年三月ニ現行ノ民事訴訟法ガ出来マシテ、翌二十四年一月カラ施行セラレテ今日ニ至ツテ居ル、次ニハ裁判所構成法、是ハナカナカ沿革ガアリマス、先ヅ初ハ明治二年七月ニ先刻御話致シタ職員令ト云フモノガ出テ、其中ニ司法官ニ相當スルモノガ定メテアツテ、大中小ノ判事、ソレカラ大中小ノ解部、其二ツノ官職ガ刑部省ニアツタ、當時ハ裁判ト云フモノハ總テ刑事ノヤウニ心得テ居ル時分デスカエ刑部ト云ツテ降ツテ明治五年八月ニ省ノ名モ司法省ト變ツタガ、司法省官等表ト云フモノガ出来テ、其中ニ裁判所ノ職制ガ定メラレタ、是ニ依テ裁判所ノ種類ガ區別セラレテ臨事裁判所司法省裁判所ソレカラ出張裁判所ソレカラ府縣裁判所、是ハ知事ガ所長ノ仕

民法總則 緒論 法律ノ沿革 我邦ノ沿革

二九二

事ヲシテ居ラレカテ各區裁判所スウ云フ名稱ヲ區別ガ出來テ、ソレカラ始メテ大審院ト云フモノノ置カレタノガ明治八年ノ四月是ハ特ニ詔書ガ出マシタ、尤モンレハ元老院ノ置カレタノト一緒デアアル元老院ノ置カレタコトハ此前ニ御話申シマシタガ、ソレト同時ニ大審院ヲ置カレタ、其詔書ノ中ニ斯ウ云フ御言葉ガアル、朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム幸ニ祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ頼リ以テ今日ノ小康ヲ得タリ願ニ中興日淺ク内治ノ事當ニ振作更張スヘキ者少シトセス朕今誓文ノ意ヲ擴充シ茲ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ廣メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ云云、大審院ノ置カレタト云フコトガ司法部ノ發達ノ一ツノ階段デアアル、其翌月即チ同年ノ五月ニ又上等裁判所ト云フモノガ置カレマシテ、ソレト同時ニ裁判所ノ職制ト云フモノガ定メラレタ、刑法、治罪法ノ施行セララルマデハ之ニ依テ居ラテ所ガ治罪法ガ明治十三年七月ニ出來テ、十五年ノ一月ヨリ施行セララルコトニナッタ、然ルニ此治罪法ハ今日日謂フ「刑事訴訟法」ニ相當スルモノデアッタノデスカラ一體其中ニ裁判所ノ構成ニ關スル規定ガアルベキ筈デハナカッタク

ナルモノトスルトキハ第三者ハ之カ爲メニ不測ノ損害ヲ被ルノ虞アリ而モ其第三者カ自己ノ過失ニ因リ代理權消滅ノ事實ヲ知ラザリシ場合ニ於テハ之ヲ保護スルノ必要ナキモ若シ善意ノ場合ニ於テハ之ヲ保護スルノ必要アルヘシ故ニ我民法ニ於テ代理權ノ消滅ハ之ヲ以テ善意ノ第三者ニ對抗スルモノトヲ得スト規定セリ但第三者カ過失ニ因リテ其事實ヲ知ラザリシトキハ特ニ之ヲ保護スルノ必要ナキカ故ニ本人ハ之ニ對シ代理權ノ消滅ヲ對抗スルコトヲ得ルモノトス(第一一二條參照) 代理人ノ職務ハ其代理人ノ職務ニ依リテ履行スルモノトス

第五款 復代理

復代理ノ如何ナルモノナルカニ付テハ種種ノ議論アルカ如シ然レトモ予ハ我民法ノ解釋トシテハ復代理人トハ代理人カ其權限内ノ行爲ヲ全部又ハ一部ヲ爲スニ付キ選任シタル本人ノ代理人ヲ謂フモノナリトスルヲ穩當ナリト信ス故ニ復代理人タルニハ左ノ要件ヲ具備セザルハカラ其代理人ニ非ズ

(イ) 復代理人ハ本人ノ代理人タルモノトシテ其代理人ノ職務ニ依リテ履行スルモノトス

民法總則 法律行爲 代理

110R

復代理人ハ本人ノ代理人ニシテ代理人ノ代理人ニ非ス故ニ若シ例ヘハ代理人カ自己ノ代理人ヲ選任スル場合アルモ其代理人ハ復代理人ニ非ス

(甲) 代理人カ選任スルコトハ本人カ選任スルコトヲ要ス若シ之ニ反シ本人カ選任シタル復代理人ハ代理人ニ於テ選任スルコトヲ要ス若シ之ニ反シ本人カ選任シタル事キハ其代理人ハ復代理人ニ非スシテ單純ナル代理人ナリト信ス予カ茲ニ本人カ選任スルトハ本人カ自ら選任スル場合ノミヲ謂フニ非スシテ本人カ代理人ニ權限ヲ付與シ之ヲ選任シタル場合ヲモ包含ス即チ等シク代理人カ選任シタル代理人ニテモ本人カ自ら選任スルノ權限ヲ付與セラレ其權限ニ基キ本人ノ名ニ於テ代理人ヲ選任シタル場合ニ於テハ其代理人ハ復代理人ニ非スシテ單純ナル代理人ト謂フヘキモノナリト信ス

(乙) 代理人ノ權限内ノ行為ノ全部又ハ一部ヲ爲サシムルニ付キ選任スルコトハ復代理人ハ代理人ノ權限内ノ行為ノ全部又ハ一部ヲ爲スニ付キ選任シタルモノ之ヲ要ス故ニ例ヘハ代理人ノ權限内ノ行為ト全ク別種類ノ行為ヲ爲スニ付キ選任シタル代理人ハ復代理人ニ非ス又例ヘハ代理人ノ權限内ニテモ一層大ナル權限ヲ有スル代理人ヲ選任シタルトキハ是レ亦復代理人ニ非ス

ナル權限ヲ有スル代理人ヲ選任シタルトキハ是レ亦復代理人ニ非ス

代理人ハ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ種種ナル學說及ヒ立法例アルカ如シ我民法ノ解釋トシテハ此問題ニ付テハ委任ニ因ル代理ノ場合ト法定代理ノ場合トヲ區別セサルヘカラス

(イ) 委任ニ因ル代理ノ場合

委任ニ因ル代理人カ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ種種ノ立法例アリ例ヘハ佛國ニ於テハ多數ノ解釋者ノ說ニ依レバ委任ニ因ル代理人ハ原則トシテ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルカ如シ(同民法第一九九四條參照之ニ反シ)獨逸民法ニ於テハ委任ニ因ル代理人ハ復代理人ヲ選任スル權利アリヤ否ヤニ付キ疑アル場合ニ於テハ之ヲ選任スルコトヲ得サルカ如シ(同民法第六六四條參照)我民法ニ於テハ委任ニ因ル代理人ハ復代理人ヲ選任スルコトヲ得タルヲ原則トス(第一〇四條參照)而シテ其立法ノ趣旨ヲ考フルニ元來委任者ハ代理人自身ヲ信シ之ヲ適任者トシテ之ニ委任シタルモノニシテ代理人カ自ら適任ト認メタル者ニ更ニ代理ヲ爲サシムルノ意思アルモノト認ムルコトヲ得

ナルヲ以テ代理人カ原則トシテ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルモノト爲スト
 キハ委任ノ本旨ニ背クニ至ルカ故ナルヘシ然レトモ我民法ハ此原則ニ對シ實
 際ノ便宜ノ爲メ二ノ例外ヲ認ム即チ委任ニ因ル代理人ハ本人ノ許諾ヲ得ルカ
 又ハ已ムコトヲ得サル事由アルトキハ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルモノト
 セリ第一〇四條參照而シテ茲ニ已ムコトヲ得サル事由トハ各場合ニ依リテ決
 スヘキ事實問題ニシテ一般ニ其場合ヲ舉タルコトヲ得スト雖モ例ヘハ代理人
 カ病氣ノ爲メニ其職務ヲ執ルコトヲ得ス然ルニ若シ之ヲ其儘ニ放任スルトキ
 ハ本人ノ爲メニ損害ヲ招クノ虞アルカ如キハ其一ナルヘシ第二〇四條參照
 右ノ如ク委任ニ因ル代理人ハ例外トシテ復代理人ヲ選任スルコトヲ得然ラハ
 此場合ニ於テ復代理人ハ本人ニ對シ如何ナル責任ヲ負擔スヘキモノナリヤ若
 シ代理人カ專斷ニ復代理人ヲ選任スルモノナルトキハ此復代理人ヲ選任シタ
 ルカ爲メニ生シタル一切ノ損害ニ付キ本人ニ對シ其責任スルハ當然ノ事ナ
 リト信ス然レトモ我民法ニ於テ委任ニ因ル復代理人カ復代理人ヲ選任スルコ
 トヲ得ル場合ハ本人ノ許諾ヲ得タルトキ又ハ已ムコトヲ得サル事由アルトキ

ニ限ルモノナリ然ルニ此ノ如キ場合ニ於テ代理人カ復代理人ヲ選任シタルカ
 爲メニ之ニ因リテ生スル一切ノ損害ヲ賠償セサルヘカラストセハ頗ル酷ニ失
 スルモノナリト謂ハサルヘカラス故ニ我民法ニ於テハ委任ニ因ル代理人カ復
 代理人ヲ選任シタルトキハ唯其選任及ヒ監督ニ付テハ本人ニ對シテ其責任
 任スヘキモノトセリ第一〇五條第一項參照即チ代理人カ相當ノ注意ヲ用ヒテ
 代理人ヲ選任シ又相當ノ注意ヲ以テ復代理人ヲ監督シタル以上ハ他ニ復代理
 人ノ爲メニ如何ナル損害ヲ生スルモ本人ニ對シ其責任任スヘキモノニ非ス尙
 ホ代理人カ本人ノ指名ニ從ヒテ復代理人ヲ選任シタル場合ハ代理人ノ本人ニ
 對スル責任ハ我民法上一層輕シ即チ代理人ハ復代理人ノ不適任ナルコト又ハ
 不誠實ナルコトヲ知リテ之ヲ本人ニ通知スルコトヲ怠リ又ハ之ヲ解任スルコ
 トヲ怠リタルノ事實ナキ以上ハ復代理人ノ爲メニ如何ナル損害ヲ生スルモ本
 人ニ對シテ其責任任セス第一〇五條第二項參照
 (ロ) 法定代理ノ場合
 法定代理人ハ委任ニ因ル代理人ト異ナリ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルヲ原

則トス(第一〇六條參照)此ノ如ク我民法上二者ノ間ニ區別ヲ爲シタル所以ハ法定代理人ハ通常委任ニ因ル代理人ニ比シ其權限廣キモノナリ故ニ其權限内ノ一切ノ行為ヲ常ニ自ラ爲スハ極メ困難ナリ又委任ニ因ル代理人ハ復代理人ヲ選任スルニ付キ本人ノ許諾ヲ得ルノ便宜アルモ法定代理人ノ場合ニ於テハ本人カ無能力者ナルカ法人ナルカ又ハ不在者等ナルカ故ニ復代理人ヲ選任スルニ付キ其許諾ヲ得ルコトヲ得サルカ如キ事情アルカ爲メナルヘシ故ニ法定代理ノ場合ニ於テハ原則トシテ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルモノト爲シタルハ正當ナリト信ス但此他尙ホ特種ノ法定代理ニ付テハ特種ノ規定アリ此點ハ特ニ注意ヲ要ス(第五條參照)

法定代理人カ復代理人ヲ選任シタルトキハ本人ニ對シ如何ナル責任ヲ負擔スヘキモノナルヤ前述シタル如ク法定代理ノ場合ニ於テハ全ク自己ノ意思ニ依リ自由ニ復代理人ヲ選任スルコトヲ得ルモノナルカ故ニ委任ニ因ル代理ノ場合ヨリモ其責任重カラサルヘカラス加之法定代理人ニ對シテハ一方ニ於テハ原則トシテ復代理人ヲ選任スルコトヲ許スニモ拘ハラズ他ノ一方ニ於テモ

因リテ生ズル損害ニ對スル責任輕キモノト爲ストキハ法定代理人ハ濫ニ復代理人ヲ選任シ其職務ヲ曠廢スルノ虞アリ故ニ復代理人選任ノ場合ニ於ケル法定代理人ノ責任ハ委任ニ因ル代理人ニ比シ一層重大ナルモノト爲ササルヘカラスト信ス我民法ノ規定ニ依レハ法定代理人ハ皆ニ復代理人ノ選任及ヒ監督ノモノヲス復代理人ノ爲メニ生シタル一切ノ損害ニ付キ本人ニ對シ其實任スヘキモノナリ但法定代理ノ場合ニ於テモ已ムコトヲ得サル事由アリタルカ爲メニ復代理人ヲ選任シタルトキハ委任ニ因ル代理ノ場合ト區別スルノ理由ナキカ故ニ此場合ニ於テハ單ニ復代理人ノ選任及ヒ監督ニ付テノ其責任スヘキモノナリ(第一〇六條參照)

以上述ヘタルカ如ク委任ニ因ル代理人ハ例外トシテ又法定代理人ハ原則トシテ復代理人ヲ選任スルノ權利ヲ有スルモノナリ然レトモ此代理人カ復代理人ヲ選任スルノ權利(Substitutionsbefugnis)ハ所謂代理人ノ權限ナルヤ否キ我民法ノ解釋トシテ之ヲ代理人ノ權限ト爲ス者少カラサルカ如シ然レトモ予ハ代理人ノ有スル復代理人選任ノ權利ハ或ハ之ヲ代理人ノ權利ト謂フコトヲ得ヘキモ

代理人ノ權限ニ非サルヘシト信ス若シ或論者ノ言ノ如ク復代理人ノ選任ノ權
 利カ代理人ノ權限ナリトセハ代理人ノ復代理人選任ハ本人ノ名ニ於テ之ヲ爲
 シ直接ニ本人ニ對シテ其效力ヲ生スヘキモノナラサルヘカラス若シ果シテ然
 リトセハ民法第百七條第一項ニ復代理人ハ其權限内ノ行爲ニ付キ本人ヲ代表
 スト云フカ如キ規定ハ一箇ノ贅文タルノミナラス同條第二項ニ復代理人ハ本
 人及ヒ第三者ニ對シテ代理人ト同一ノ權利義務ヲ有スト云フカ如キ規定ハ之
 ヲ解スルコトヲ得サルニ至ルヘシト信ス前ニモ述ヘタルカ如ク代理人カ本人
 ヲリ付與セラレタル權限ニ依リ本人ノ名ニ於テ代理人ヲ選任スル場合ハ本人
 カ自ラ代理人ヲ選任スル場合ト同シタ我民法ニ所謂復代理人ニ非スト信ス是
 レ予カ復代理人選任ノ權利ハ代理人ノ權限ニ非スト言フ所以ニシテ又前ニ代
 理權ノ範圍即チ代理人ノ權限ノ事ヲ説明スル際ニ復代理人選任ノ事ヲ述ヘテ
 ナリ所以ナリト云フハ要ヨリ因テ代理人ニ其ノ一權限カハ代理人ノ權限ニ非
 復代理人選任ノ權利カ代理人ノ權限ナルヤ否ヤヲ研究スルハ管ニ民法ノ解釋
 上必要ナルノミナラズ訴訟ノ實際等ニ於テモ甚タ必要ナリト信ス例ヘハ商法

將來ニ發生スヘキ妨害ノ危險ヲ豫防シ又ハ將來ニ於テ占有者カ損害ヲ被リシ
 トキハ之ヲ賠償セシムルカ爲メ豫メ擔保ヲ請求スルコトヲ以テ目的トスル訴
 ナリ此訴ヲ提起スルニハ占有保持ノ訴ノ場合ト異ナリ他人カ占有物ニ關シテ
 現實ニ損害ヲ加ヘタルコトヲ必要トセス唯占有ノ妨害ト爲ルヘキ危險ノ存ス
 ルコトヲ要スルモノニテ其危險ハ他人ノ行爲又ハ不行爲ニ因リ存續スルモノ
 ナルトキハ之ヲ止メシメ若クハ或行爲ヲ爲サシメ占有ノ妨害ヲ未萌ニ防キ若
 シ他人カ其行爲ヨリ占有者ノ慮ルカ如キ損害ヲ生スルコトナシト主張セハ損
 害ヲ生シタルトキニ於ケル賠償義務ノ履行ヲ確實ナラシムルカ爲メ豫メ擔保
 ヲ提供セシムルコトヲ目的ト爲スモノナリ例ヘハ隣人ノ建築セントスル家屋
 カ非常ニ高クシテ占有者ノ家屋内ニ受クヘキ光線ヲ遮ルカ如キ虞アルトキ又
 ハ隣人カ築カントスル煙突カ低キニ失シテ多量ノ煙ヲ隣地ニ排泄セシムルカ
 如キ虞アル場合ニハ占有者ハ其工事ヲ廢シ又ハ變更セシムルコトヲ得ヘタ又
 隣人ニ屬スル樹木カ枯レタルニモ拘ハラス之ヲ除去セサルカ爲メ其枯木カ倒
 レテ占有者ノ家屋ニ損害ヲ與アルカ如キ爆發物等ニ必要ナル豫防ヲ爲

民法編 占有權ノ效力

ナスシテ之ヲ隣地ニ貯藏スルカ爲メ相隣者ニ損害ヲ生スヘキ危險アルトキハ其危險ヲ豫防スルニ必要ナル設備ヲ爲サシムルカ如キ是ナリ此訴ハ占有妨害ノ危險ヲ豫防スルコトヲ以テ目的ト爲スモノナルカ故ニ其危險ノ存在スル間ハ何時ニテモ之カ訴ヲ提起スルコトヲ得ヘシ然レトモ其危險カ工事ニ原因セル場合ニ於テハ工事著手ノ時ヨリ一箇年ヲ經過シタルトキ若クハ其工事カ既ニ落成シタルトキハ最早ヤ此訴ヲ提起スルコトヲ得ス其理由ハ占有保持ノ訴ニ付キ説明シタルト同一ナルヲ以テ茲ニ説明ヲ略スヘシ

第三 占有回收ノ訴

占有回收ノ訴トハ占有者カ其占有物ヲ奪ハレタルトキニ於テ其物ノ返還及ヒ損害賠償ヲ要求スルコトヲ以テ目的トスル訴ナリ

此訴ハ(一)原告カ占有權ヲ有スルコト、原告カ占有シタル事實ニ因リ占有權ヲ有スルニ非サレハ占有物ヲ奪ハルルモ其物ノ返還ヲ要求スヘキ理由ナキカ故ニ占有權ヲ以テ此訴ノ根本要件ト爲スコト言フ埃タス(二)被告カ不法行爲ニ因リ原告ノ占有ヲ奪ヒタルコト若クハ不法行爲ニ因リ原告ノ占有ヲ奪ヒタル事實

ヲ知リタルコト民法第二百條ニハ「占有者カ其占有ヲ奪ハレタルトキ」トアルニ由リ自己ノ過失又ハ詐欺錯誤等ニ基キ占有物ヲ引渡シタルトキ若クハ自己ノ過失ニ因リテ占有物ヲ失ヒタル場合等ニ於テハ此訴ヲ以テ物ノ返還ヲ請求スルコトヲ得ス蓋シ此訴ニ依リ占有物ノ回收ヲ請求シ得ヘキ場合ハ第三者カ禁止セラレタル私力ニ依リ占有物ヲ奪ヒタルトキ若クハ其事實ヲ知リテ之ヲ讓受ケタルトキニ限ルモノナリ即チ被告カ暴行又ハ隱秘ノ手段ニ依リ占有者ノ意思ニ反シテ占有物ノ所持ヲ奪ヒタルコトヲ必要條件トス占有物掠奪ノ行爲ハ被告ノ行爲タルコトヲ要スルモノナレトモ苟モ被告ノ命令又ハ委任ニ依リテ爲シタル行爲ハ被告ノ行爲タルニ妨ナシ然レトモ第三者ノ飼犬カ隣人ノ雞ヲ齧ミタルカ如キ場合ハ縱令其雞カ第三者ノ手中ニ在ル場合ニテモ占有回收ノ訴ニ依リ之カ返還ヲ求ムルコト能ハス又被告ノ行爲ハ不法ナルコトヲ前提トスルモノナルカ故ニ執達吏若クハ收稅官吏カ職權ヲ以テ他人ノ占有ヲ奪ヒタル場合ニハ此訴ヲ提起スル要件ヲ缺クモノナリ

故ニ法律ハ特別ノ出訴期間ヲ設ケテ占有物侵奪ノ時ヨリ一箇年タルヘキ旨ヲ規定セリ是レ占有保全ノ訴ト異ナリ妨害ノ豫防ヲ目的トスルニ非シテ既ニ生シタル占有ノ喪失ヲ回復スルコトヲ以テ目的ト爲セハナリ此訴權ハ對人訴權ニシテ占有ヲ奪ヒタル者及ヒ其一般承繼人若クハ其事實ヲ知リテ之ヲ承繼シタル特定承繼人ニ對シテノミ之ヲ行フコトヲ得ルモノニシテ善意ヲ以テ其物ヲ讓受ケタル特定承繼人ニ對シテハ此訴ヲ提起スルコトヲ許サズ占有ノ訴ト本權ノ訴トノ關係 本權ノ訴トハ法律上占有ヲ爲スヘキ權利ヲ基礎トスル訴ヲ謂フ例ヘハ所有權ニ基ク訴質權地上權ニ基ク訴ノ如キ是ナリ蓋シ占有權ハ占有ニ因リテ生スルモノニシテ本權ヲ有スルモ必スシモ占有權アリト謂フコトヲ得ス又之ト正反對ニ占有權アルモ必スシモ本權ヲ有スルモノニ非ス法理上兩者ハ互ニ無關係ニ獨立セリ故ニ占有ノ訴ニ敗訴スルモ尙ホ本權ノ訴ヲ提起スルコトヲ妨ケス又本權ノ訴ニ敗訴スルモ占有ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ヘシ舊法典ニ於テハ本權ノ訴ニ於テ確定ニ敗訴シタル者ハ占有ノ訴ヲ起スコトヲ得サルモノトセリ是レ法律上占有ヲ保護スル基礎ヲ所有權ヲ有

スト云フ推定ニ置クモノニシテ所謂占有ノ保護ハ即チ所有權ヲ保護スルモノナリトノ説ニ基クモノナリ隨テ判決ニ依リテ所有權ナキコト確定シタル以上ハ占有ヲ保護スヘキ理由當然消滅スルカ故ニ占有ノ訴ヲ認ムルノ必要ナケレハナリ又原告ニ於テ本權ノ訴ノ判決ニ至ラサル以前ニ其訴ヲ取下ケタルトキハ其前ノ事實ノ爲メニ更ニ占有ノ訴ヲ起スコトヲ得ストセリ其理由トスル所ハ一般ノ學說ニ依レハ占有ニ妨害ヲ受ケタルトキハ占有者ハ占有有訴訟ヲ起シテ妨害ヲ除去スルコトヲ得ルニ拘ハラズ本權ノ訴訟ヲ提起スル前ニ之ヲ提起セサル所以ハ其占有ハ法律上ノ要件ヲ具備セザルカ或ハ占有ノ訴ニ勝テ制スル見込ナキモノトシテ暗ニ起訴權ヲ拋棄シタルモノナリト推定スルニ由ルモノナリトセリ是レ訴訟手續ノ如何ニ依リ占有ヲ保護スルト否トヲ決定セントスルモノニシテ占有保護ニ關スル根本ノ觀念ヲ誤リタルモノト謂ハサルヘカラス現行民法ニ於テハ前節ニ於テ述ヘタルカ如ク占有保護ニ關スル理由ハ本權ヲ保護スル目的ニ出ツルモノニ非スシテ社會ノ秩序ヲ保持セントスルニ在ルカ故ニ占有ノ訴ト本權ノ訴トハ互ニ相妨タルコトナキ原則ヲ採用セリ即チ

本權ノ訴ニ敗訴スルモ占有ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ヘタ又本權ノ訴ト占有ノ訴ト同時ニ並行シテ提起スルコトヲ得ヘタ又占有ノ訴ニ敗訴スルモ尙ホ本權ノ訴ヲ提起スルコトヲ妨ケス

占有者ノ權利ハ占有物ニ對シテ有スル本權ト關係ナク本權ノ爭ト占有權ノ爭トハ全ク其目的ヲ異ニスルカ故ニ佛蘭西訴訟法及ヒ獨逸普通法等ニ於テモ皆本權ニ關スル理由ニ基キ占有ノ訴ヲ裁判スルコトヲ得ストセリ我民法ニ於テモ同一主義ヲ採用シ占有訴訟ヲ提起シタル者アルトキハ被告ハ原告ノ占有物ニ付キ占有ヲ爲スヘキ權利ヲ有ストノ理由ヲ以テ抗辯ト爲スコトヲ得ス元來占有ノ訴ト本權ノ訴トハ各其爭點ヲ異ニスルカ故ニ占有ノ訴ヲ裁判スルニ付テハ占有事實ノ範圍ヲ脱シ占有ヲ爲スヘキ權利ノ有無ヲ審查シ本權ヲ基礎トシテ其當否ヲ判決スヘキニ非ス唯原告ニ於テ占有權取得ノ條件ヲ具フルヤ否ヤ其訴ハ法定ノ期間内ニ提起セラレタルモノナリヤ否ヤ被告ニ於テ原告ノ主張スルカ如キ占有ヲ妨害セル行爲アリヤ否ヤ占有ヲ略奪シタル行爲存在セシヤ否ヤヲ審查スルヲ以テ足レリトスルモノニシテ其妨害又ハ略奪シタル行爲

ハ正當ノ權利ニ基キシモノナリヤ否ヤヲ講究スヘキ必要ナケレハナリ

第二款 一定ノ條件ヲ具備スル占有ハ即時ニ

動産ノ上ニ行使スル權利ヲ取得スル

效力ヲ生ス

一定ノ條件ヲ具備スル占有トハ(一)平穩(二)公然(三)善意(四)無過失ノ四要素ヲ有スル占有ヲ謂フモノニシテ占有ノ始ニ於テ此四要素ヲ具備セハ占有者ハ即時ニ其占有セル動産ノ所有權又ハ質權ヲ取得スルコトヲ得第一九二條蓋シ動産ハ各人ノ間ニ容易ニ轉授受セララルモノニシテ且其取引ハ日常頻繁ニ行ハラルモノナルカ故ニ不動産ノ如ク登記ノ手續ニ依リテ其權利ノ所在ヲ明確ナラシムルコトヲ得ス若シ強ヒテ何人モ自己ノ有スルヨリ大ナル權利ヲ讓渡スコトヲ得ストノ原則ヲ適用シテ眞ノ權利者ニ非サレハ其動産ヲ讓渡スモ讓受人ハ動産上ノ權利ヲ取得スルコトヲ得シテ何時ニテモ眞ノ所有者ヨリ取戻ヲ請求セラルルモノトセハ讓受人ハ常ニ讓渡人ニ對シテ其動産上ノ權利者ナル

コトヲ立證セシメ而シテ後之ヲ授受セザレハ取引ノ安全ヲ保持スルコト能ハス然ルニ動産ノ取引ニ關シ毎ニ真正ノ權利者ナルコトヲ立證シテ授受スルコトヲ必要トセハ爲メニ取引ノ滯留ヲ來シ繁劇ナル社會ノ需要ヲ満足セシムルコト能ハサルニ至ルヘシ隨テ動産ニ關スル取引ノ敏活ト安全トヲ保持スルカ爲メ右ノ原則ニ例外ヲ認メ平穩且公然善意然過失ニ動産ノ占有ヲ始メタル者ハ前者カ其動産上ニ權利ナクシテ占有ヲ移轉シタル場合ニテモ仍ホ其動産上ノ權利即チ所有權又ハ質權ヲ取得スルモノナリト規定シタル所以ナリ(第一九二條)

右ノ規定ハ取引ニ因リ動産ヲ占有セシ者ヲ保護スル者ナレトモ其規定ヲ絕對ニ適用セハ一方ニ於テハ動産ノ所有權ニ對スル保護ヲ薄弱ナラシムル虞アルヲ以テ更ニ例外ノ規定ヲ設ケ之カ調和ヲ圖ルコトヲ要ス即チ其占有物カ所有者ノ意思ニ反シ他ニ移轉セラレタルトキハ占有物移轉ノ時ヨリ二箇年間占有者ニ對シ其物ノ回復ヲ請求スルコトヲ得ルコトヲ認メタリ此場合ヲ區別セハ(二)占有物カ盜品ナルトキ(三)占有物カ遺失品ナルトキノ二ト爲スコトヲ得(第一

九三條)ハ之ノ場合ニ於テハ盜品ノ返還ニ對シ其費用ヲ支出スルハ其ノ義務ニシテ古昔ノ同

一 占有物カ盜品ナル場合ニ於テ盜品ハ所有者ノ意思ニ反シテ占有ヲ失ハシメタルコト明カナルモノニシテ縱令取引ニ因リ其占有ハ善意ノ第三者ニ移轉シタルトスルモ被害者ヲ保護シテ之カ取戻ヲ請求スル權利ヲ認メタルヘカラス而シテ此權利行使ノ期間ハ盜難ノ時ヨリ起算シテ二箇年トセリ然レトモ競賣ノ方法又ハ公ノ市場ニ於テ若クハ其物ト同種ノ物ヲ販賣スル商人ヨリ善意ニテ買受ケタル場合ニハ所有者ハ占有者カ拂ヒタル代價ヲ辨償セザレハ其物ヲ取戻スコトヲ得ス

二 占有物カ遺失物ナル場合ニ遺失物ハ他人ノ行爲ニ因リ占有ヲ喪失セシモノニ非サルモ占有ノ喪失ハ所有者ノ意思ニ反スルモノナルコト盜品ノ場合ト異ナルコトナキカ故ニ法律ハ盜品ニ對シテ被害者ヲ保護スルト同一ノ程度ニ於テ之ヲ保護セリ或ハ遺失物ハ第二百四十條ノ規定ニ依リ公告シタル後一箇年內ニ其所有者判明セザルトキハ拾得者其所有權ヲ取得ストアリ第百九十三條ニハ遺失ノ時ヨリ二箇年間占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルコトヲ得

トアルハ前後矛盾セル規定ノ如キ疑ヲ起ス者ナルモ右ノ規定ニ決シテ抵觸スルモノニ非ス何トナレハ第九十三條ニ於テハ遺失物ナルコトヲ前提トスルモノニシテ第二百四條ニ依リ遺失物カ既ニ拾得者ノ所有ト爲リタルトキハ最早遺失物ナラサルカ故ニ之ニ關シテハ第九十三條ヲ適用スヘキモノニ非テレハナリ但遺失シタル物カ家畜以外ノ動物ニシテ占有者カ其占有ノ始ニ善意ナリシトキハ其逃走シタル時ヨリ一箇月内ニ買主ヨリ回收ノ請求ヲ受テザレハ占有者ハ其期間ヲ經過スルト同時ニ其物ノ上ニ行使スル權利ヲ取得ス(第一九五條)茲ニ注意ヲ要スヘキハ所有者カ占有者ヨリ占有物ヲ回復シタル場合ニ其物ニ關シテ占有者カ費シタル費用アルトキハ回收者ハ如何ナル程度ニ於テ之ヲ賠償スヘキ義務ヲ有スヘキカノ問題ナリ蓋シ占有物ニ關シテ費シタル費用ヲ區別スレハ之ヲ必要費有益費奢侈費ノ二ト爲スコトヲ得

一 必要費 必要費トハ其物ノ維持保存ニ要シタル費用ヲ謂フモノニシテ此費用ハ物ノ現狀ヲ維持シ保存スルニ缺クヘカラサルモノナリ隨テ所有者カ占有ヲ失ハサル場合ニ於テハ必ス此費用ヲ支出スヘキモノナルカ故ニ占有ヲ回

收シタル以上ハ回收者ニ於テ之ヲ負擔スヘキハ當然ナリ然レトモ必要費中ニモ之ヲ細分シレハ通常費ト臨時費トノ別アリ通常費トハ物ノ用方ニ從ヒ當然生スヘキ費用ヲ謂フモノニシテ例ヘハ牛馬ヲ使用スルニ要スル食料ノ如シ此等ハ其物ノ使用ニ因リテ生スヘキ事實ヲ取得スル者ニ於テ負擔スルヲ當然トスルカ故ニ占有者ニ於テ其事實ヲ取得シタルトキハ回收者ハ之ヲ償還スヘキ義務ナシ之ニ反シテ其物ノ大修繕ニ要シタル費用ノ如キハ臨時ノ費用ニ屬スルカ故ニ回收者ニ於テ全部之ヲ負擔セザルヘカラス(第一九六條)

二 有益費 有益費トハ其費用ニ依リテ其物ノ效用ヲ増進セシムル費用ヲ謂フ隨テ有益費ヲ加フルコトニ依リテ其物ノ價格ハ増加スル結果ヲ生ス即チ改良費ノ如キ是ナリ而シテ費用ヲ投シタルニ因リテ物ノ增加價格カ現ニ存在セルニ拘ハラヌ回收者ヲシテ之ヲ負擔セシムルコトヲ得ルモノトシテ占有物ノ回收ヲ爲スコトヲ得ルモノトセシカ其價格ノ増加シタル部分ハ回收者ニ於テ不當ノ利益ヲ得ルニ至ルカ故ニ不當利得ノ原則ニ基キ有益費ニ因リテ増加シタル價格ハ是ヲ占有者ニ賠償セシムルヲ當然トシ然レトモ或場合ニハ占有者ノ費シタル費用ヨリ

モ増加價格少キコトアルヲ以テ此増加價格少キニ拘ハラス回收者ヲシテ其費用ノ全部ヲ負擔セシムルハ理由ナキコトナルカ故ニ回收者ノ選擇ニ從ヒ其費用ヲ辨償スルカ又ハ其増加價格ヲ辨償セシムルカ孰レノ途ヲ選フモ自由ナリトセリ第一九六條第二項但惡意ノ占有者ニ對シテハ回收者ノ便宜ヲ計リ其請求ニ因リテ裁判所ハ辨償費ノ支拂ニ付キ相當ノ期間ヲ定ムルコトヲ得ト規定セリ利益費モ賦セハレトモ其時ハ賠償ノ限ニ於テハ請求書ヲ提出スルニ依リテ三 奢侈費 奢侈費トハ全ク占有者カ自己ノ嗜好ノ爲メニ費シタル無益ノ費用ナルカ故ニ回收者ニ於テ之ヲ辨償スヘキ責ニ任セサルモノナリ

第三款

占有者ハ適法ニ占有物ノ上ニ權利ヲ有

スルモノト推定セラル

占有權ヲ有スル者ハ物上權ニ付テ之ヲ適法ニ有スルモノト推定セラルルカ故ニ其權利ノ爭ニ付テハ常ニ立證ノ責ニ任セス即チ反對ノ證據ナキ限ハ占有者ハ權利者トシテ認定セラレルモノニシテ此效力ハ實際ニ於テ占有者ニ取テ大

又日獨領事職務條約第十七條第一項ニ左ノ如キ規定アリ
 總領事、領事、副領事及代辦領事ハ本國軍艦又ハ商船ノ士官、役員、水夫、其他乗組員ニシテ脱艦脱船ノ罪アル者又ハ脱艦脱船ノ廉ヲ以テ告訴セラレタル者ヲ右艦船又ハ本國ニ送還スル爲メ逮捕ヲ求ムルコトヲ得ヘシ
 脱走海員ヲ引渡ス理由ハ一般犯罪人ヲ引渡スノ理由ト異ナルモノアリ何トナレハ商船ノ水夫、火夫等カ脱艦脱船ハ單ニ契約違反ト爲ルノミニシテ犯罪ヲ構成スルモノニ非サレハナリ又軍艦ノ水兵等カ脱艦脱船スルモ唯軍事上ノ犯罪ヲ構成スルノミニシテ他國ノ安全ヲ害スルコトナケレハナリ是故ニ脱走海員引渡ノ理由ハ之ヲ他ニ求メサルヘカラス其理由ハ引渡ヲ受ケテ處罰センカ爲メニ非スシテ船舶航行ノ安全ト利益トヲ得シカ爲メナリト云フニ歸スヘシ故ヲ以テ脱走海員引渡ニ關スル事ハ之ヲ犯罪人引渡條約中ニ約定セスシテ通商航海條約及ヒ領事職務條約中ニ之ヲ定ム其引渡ニ關スル原則ト稱スヘキモノハ船ノ所屬國ノ領事ヨリ其地ノ官廳ニ書面ヲ以テ引渡ヲ請求スルコト、脱走海員カ其船ニ屬スルモノナルコトノ證明ヲ爲スコト、脱走海員カ滞在在地ニ於テ犯罪ヲ

國際公法(平時) 本論 國家ノ權利 實質上ノ權利 司法權

爲シタルトキハ刑ノ執行ヲ終ルルヲ引渡ヲ受ケルコトヲ得、ナルコト、自國人ナレハ引渡ヲ爲ササルコト等是ナリ。明治二十九年ノ日清通商航海條約第二十四條ノ規定ノ如キモ、逃走海員ノ引渡ニ非スト雖モ、負債ヲ辨償セサル者ヲ引渡スヘシト定メタリ。是レ均シク犯罪人引渡以外ノ引渡ノ一種ニ屬スルモノナリ。

第四款 混合裁判

混合裁判トハ自國ノ裁判官ト外國人タル裁判官トカ混合シテ判決ヲ與フルモノヲ謂フ。國家ハ裁判ニ關スル自主獨立ノ權利ヲ有スルカ故ニ外國人ヲ裁判官ト爲ササルヘカラサルノ義務ナシ故ニ混合裁判ハ條約ヲ待テテ始メテ生スル所ノ一種ノ異例ナリ。我國ノ舊時ニ於テ外國例ヘハ支那トノ條約ニ基キ外國領事カ我行政官ノ爲ス所ノ裁判ニ立會ヒ之ニ依リテ判決ヲ下シタルコトアリト雖モ此ノ如キ立會裁判ハ茲ニ所謂純然タル混合裁判ニ非ス。我國ニ於テ明治四年以降數回外國トノ條約改正案ニ混合裁判所ヲ設ケンシタルコトアリト雖

モ幸ニシテ一タヒモ成功スルコトナカリキ

外國ニ於ケル混合裁判所ノ最モ重ナルモノハ埃及ナリ。埃及ニ於テ混合裁判所ノ設ケラレタルハ千八百六十七年、六十九年、七十年及ヒ七十二年ノ條約ニ由ル。此處ニ至リ英佛獨逸伊ノ五箇國ハ埃及混合裁判所構成法ナルモノヲ作リ第一審ノ混合裁判所ヲ「アレキサンドリヤ」「カイロ」「イスマイラ」ノ三箇所ニ置キ歐洲人四名、埃及人三名ヲ裁判官ト爲シ終審裁判所ハ「アレキサンドリヤ」ノミニ之ヲ置キ歐洲人七名、埃及人四名ヲ裁判官ト爲スヘキコトヲ定メタリ。此等歐洲人裁判官ハ埃及副王之ヲ任命スルモノナレトモ以上ノ五箇國ノ發議ニ反對スルコト能ハサルナリ。而シテ此裁判所ハ埃及ノ法律ヲ適用スルモノニ非スシテ歐洲諸國カ定メタル埃及法典ナルモノヲ適用スルナリ。又混合裁判所ハ千八百七十六年ニハ向テ五箇年間之ヲ繼續セシムヘシト定メタリシモ其後永久ニ斯ル裁判所ヲ置クヘシト定メタリ。

此混合裁判所カ有スル所ノ權限左ノ如シ

第一 民事

國際公法(平時) 本論 國家ノ權利 實質上ノ權利 司法權

第一 埃及ニ在ル不動産又ハ不動産ニ關スル權利カ争ノ目的物タルトキ
第二 歐羅巴人ト埃及人トノ間ノ總テノ爭議

第三 刑事ノ裁判

第四 前總テノ違警罪

第五 混合裁判所又ハ混合裁判所ノ裁判官ニ對スル重罪及ヒ輕罪

第六 混合裁判所ノ判決ノ執行ヲ妨害セントスル目的ヲ以テ爲シタル重罪

第七 及ヒ輕罪

第八 混合裁判所ノ裁判官カ其職務ニ關シテ犯シタル重罪及ヒ輕罪

第九 混合裁判所ノ權限以外ニ在ルモノハ悉ク純然タル埃及ノ裁判所即チ埃及人ノ

第十 以テ組成スル裁判所ノ權限ニ屬スルモノナリト誤解スヘカラス何トナレ

第十一 埃及及ト外國トノ間ニハ領事裁判權ニ關スル條約アリテ領事モ亦或事項ニ關

第十二 シテ裁判權ヲ有スレハナリ故ニ混合裁判所ノ權限ノ下ニモ屬セス領事裁判權

第十三 ノ下ニモ立タザルモノニ限リ始メテ純然タル埃及ノ裁判所ノ權限ノ下ニ立ツ

第十四 ヲナリ

第十五

第十六

此他土耳其及ヒナモニアニモ混合裁判所アリ

第三節 行政權

第一款 宣戰媾和ニ關スル行政權

國家カ自主獨立ノ權利ヲ有スト云ヘハ當然宣戰媾和ノ權利ヲ含ムモノナリ
隨テ又國家ハ軍隊ノ運動ヲ自由ニスルノ權利ヲ有ス其例外トシテ最モ著シ
キモノハ永久局外中立國ノ如シ同盟ニ關スル事ノ如キモ亦宣戰媾和ニ關スル
自主權ノ中ニ含マルルモノナリ同盟ニ關スル事ハ條約ニ由リテ生スルモノナ
リ同盟ノ大原則トスヘキコトハ互ニ敵意ヲ除クコト及ヒ一定ノ政治上ノ目的
ノ爲メニ共同ノ行爲ヲ爲スヘシト云フコト是ナリ其他同盟ヨリ生スル權利義
務ノ關係ハ總テ各條約ニ就テ見ルノ外ナシ例ヘハ平時ヨリ既ニ同盟スルカ又
ハ戰時ニ至リテ始メテ同盟ヲ爲スカ同盟ノ範圍カ陸上ノミニ限ルカ海上ニモ
及フカト云フカ如キ攻撃同盟ナルカ防守同盟ナルカ又ハ中立同盟ナルカト云
フカ如キハ一ニ該條約ニ就テ見ルノ外ナシ例ヘハ明治二十七年八月ノ日本朝

鮮間ノ同盟條約ノ如キハ戰時ヲ限トシタルモノニシテ同盟國雙方カ如何ナル權利ヲ有シ如何ナル義務ヲ負フヘキヤニ付テハ唯第二條ニ日本國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ任シ朝鮮國ハ日兵ノ進退及其糧食準備ノ爲メ及フヘク便宜ヲ與フヘシトノ規定アリタルノミ現行ノ日英同盟條約ハ既ニ平時ニ於テ存在スルモノニシテ締盟國ノ一方カ第三國ト戰爭ヲ開クトキハ他方ハ中立ヲ守ルヘク第三國カ二箇以上ト爲リタル場合ニ他方ハ一方ニ與シテ戰鬪ニ當ルヘキコトヲ約セリ此他三國同盟條約ノ如キハ同盟國カ第三國ヨリ攻撃ヲ受クレハ他方ハ中立ヲ爲スヘキモ露國ヨリ攻撃ヲ受クレハ總軍力ヲ以テ之ヲ援助スヘキコトヲ定ム同盟國ノ義務トシテ尙ホ一般ニ舉クヘキコトハ同盟國ノ一方カ他方ト分レテ自由ニ媾和條約ヲ結ブコト能ハサルコト是ナリ

第二款 交通ニ關スル行政權

第一 鐵道ニ關スル交通行政權

各國ハ此事ニ關シテモ自主獨立ノ行政權ヲ有スルモノナレトモ若シ絕對無限

シメントスル者ハ貨幣製造ノ事業モ亦私人ノ經營ニ放任スヘシト論スル者アリ例ヘハ「スベント」ノ如キ是ナリ此等ノ論者ハ彼ノ「グレシム」ノ法則ヲ忘却セルモノニシテ若シ貨幣製造ノ事業ヲ舉ケテ人民ノ手ニ任セハ粗惡ノ貨幣ヲ造リ廉價ニ之ヲ賣リ遂ニ至良ノ貨幣ヲ驅逐スルヤ必セリ故ニ貨幣ノ製造發行ハ國家之ヲ司リ所謂貨幣制度ナルモノヲ設ケサルヘカラス而シテ貨幣制度ノ基礎ハ如何ナル金屬ヲ以テ本位貨幣ト爲スカヲ定ムルニ在リトス自由山銀抑モ貨幣ヲシテ至大ノ流通力ヲ得セシメント欲セハ國家ハ之ニ與フルニ強通カヲ以テセサルヘカラス即チ一種若クハ數種ノ金屬ヲ選ヒテ本位貨幣ヲ造リ金額ノ多少ヲ論セス取引上之ヲ受納ヲ拒ムコトヲ得サラシムルヲ要スルナリ例ヘハ現今我國ノ本位貨幣ノ如シ即チ我貨幣法第七條ニ曰ク「金貨幣ハ其ノ額ニ制限ナク法貨トシテ通用ストアルカ如シ本位貨幣ハ其ノ額ニ制限ナク本位貨幣ヲ定ムルニ通常二種アリ單本位制兩本位制是ナリ單本位制ハ本位貨幣ヲ一種ノ金屬ニ限ルモノニシテ金ヲ選フトキハ金本位ト稱シ銀ヲ選フトキハ銀本位ト名ク兩本位制ニ於テハ通常金銀ノ二金屬ヲ選ヒテ同時ニ本位貨幣

ト爲シ其間ノ比價ハ法律ヲ以テ初ニ之ヲ定メ市場ニ於ケル比價變動スルニ
 兩種ノ貨幣ハ常ニ法定ノ比價ヲ以テ通用スルモノトスルニ於テハ其ノ比價ハ
 無限ノ強通力ヲ有スル本位貨幣ヲ定ムルトキハ人民ニ與フルニ所謂自由製
 ノ權ヲ以テモザルヘカラス即チ何人ト雖モ本位貨幣タルヘキ地金ヲ造幣局ニ
 輸納スルトキハ無手数料若クハ少額ノ手数料ヲ以テ之ヲ本位貨幣ニ製造スル
 ノ求ニ應セザルヘカラス此ノ如ク人民ニ自由製貨ノ權ヲ與フル所以ハ他ニア
 ラス若シ本位貨幣ノ製造額ヲ全ク政府ノ意思ニ任ズルトキハ本位貨幣ノ
 數量不足ヲ來シ爲メニ貨幣ノ價格ト地金ノ價格トノ間ニ著シキ差異ヲ生スル
 コトアレハナリ然レトモ現今金銀兩本位制ヲ採用セル諸國ハ皆銀貨ノ自由製
 造ヲ許ササルモノトス蓋シ銀價ノ下落激シキヲ以テ若シ銀貨ノ自由製造ヲ許
 ストキハ忽チ銀貨ノ漲溢ヲ來シ金貨ハ全ク其跡ヲ絶ツニ至レハナリ又金本位
 制ヲ採用セル國ニシテ尙ホ本位銀貨ノ通用ヲ許スモノアリ此ノ如ク金銀兩本
 位制ニシテ銀貨ノ自由製造ヲ禁止シ金單本位ニシテ本位銀貨ヲ有スルモノハ
 或ハ之ヲ跛行本位制ト稱スル者アリ而シテ現今歐米諸國ノ貨幣制度ハ此名稱

ヲ免レザルモノ多シトス
 金本位制ニ於テハ勿論銀本位制ニ於テモ亦小額ノ取引ノ爲メニ價格ノ少ナル
 貨幣ヲ製造發行スル必要ヲ見ルナリ此貨幣ハ補助貨幣ト稱シ本位貨幣ノ如ク
 完全ナル強通力ヲ有セス支拂ニ供シ得ヘキ額ニ制限アルモノトス例ヘハ我國
 ニ於テハ銀ノ補助貨幣ハ十圓マテ白銅及ヒ青銅貨ハ一圓マテテ限リ法貨トシ
 テ通用スルナリ而シテ補助貨幣ハ其大小宜キヲ得サルニ於テハ授受携帯ニ不
 便ナルカ故ニ廉價ナル金屬ヲ以テ之ヲ製造シ銀ヲ用フルトキハ本位貨幣ニ比
 シ量目ヲ減シ品位ヲ劣等ニシ法定ノ價格ハ初ヨリ市場ノ價格ニ比シテ高キヲ
 要スルカ故ニ補助貨幣ハ私人ノ求メニ應シテ之ヲ製造スルモノニ非サルナリ
 貨幣制度ハ本位貨幣ノ選定ニ依リテ其基礎定マルト雖モ貨幣ノ製造發行ニ關
 スル規定ヲ設ケテ始メテ之ヲ實施スルコトヲ得ルナリ其要點ヲ舉クレハ左ノ
 如シ

第一 本位貨幣タルヘキ金屬ヲ以テ價格ノ單位ヲ定ムルヲ要ス
 例ヘハ我貨
 幣法第二條ニ純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ストセルカ

如シ...

第二 貨幣ノ品位ト量目トヲ定メサルハカラスニ純金銀ハ其ニ柔軟ニ過タルヲ以テ他ノ金屬ヲ加ヘテ適當ノ硬度ヲ得セシムルヲ要ス例ヘハ我金貨幣ハ純金九百分、銅一百分ヨリ成ルモノニシテ此品位ハ諸國ノ採用スル所ナリ品位ノ定マルト共ニ貨幣毎片ノ量目ヲ定メサルヘカラス此二者定マリテ始メテ貨幣ノ每片相等シキヲ得ルナリ然レトモ實際毎片ノ品位量目毫モ差異ナキヲ期シ難キカ故ニ品質量目ニ關スル公差ナルモノヲ規定シ此公差ヲ越ユルモノハ初ヨリ發行セサルモノトス...

第三 流通貨幣ヲシテ法定ノ量目以下ニ至ラザラシムルコトヲ要ス...

始メテ發行スルニ當リテハ公差ヲ超ユルコトナシト雖モ輾轉流通スルトキハ磨損ノ爲メニ多少其量目ヲ減少スルモノトス而シテ其磨損ノ量大ナルトキハ貨幣ノ名稱上ノ價格ト實際ノ價格トノ間ニ著シキ差ヲ生スルヲ以テ本位貨幣ハ其通用最輕量目ヲ定メ其以下ニ下ルモノハ之ヲ除去スル方法ヲ講セサルヘカラス例ヘハ我貨幣法第十一條ニ於テ金貨幣ノ通用最輕量目ヲ定メ而シテ同

法第十二條ニ「金貨幣ニシテ磨損ノ爲通用最輕量目ヲ下ルモノ...」ハ其ノ額面價格ヲ以テ無手数料ニテ政府ニ於テ之ヲ引換フヘシト規定セル如キ是ナリ

第四 私人カ本位貨幣ノ製造ヲ請求スルニ當リ手数料ヲ徵收スルヤ否ヤヲ定メサルヘカラス 若シ多額ノ手数料ヲ徵收スルニ於テハ是レ即チ自由製貨ノ權ヲ害スルモノナルカ故ニ現今ニ於テハ諸國多クハ僅少ナル手数料ヲ徵收シ或ハ全ク手数料ヲ徵收セサルモノトス...

其他貨幣ノ製造ニ關シテ注意スヘキハ貨幣ノ種類貨幣ノ算則貨幣ノ形狀及ヒ大小是ナリ即チ貨幣ノ種類ハ多キニ過キヌ又少キニ失セサルヲ要シ貨幣ノ算則ハ通例十進一位ノ法ヲ用フルモノトス又形狀ハ鑿造剝竊及ヒ自然ノ磨損ヲ防クコトニ注意シ大小ハ其ニ其當ヲ失セサルコトヲ力ムヘキナリ...

第四節 貨幣ノ價格

貨幣ノ價格トハ貨幣カ他ノ財貨ニ對スル交換比例ニシテ即チ貨幣ノ購買力ヲ謂フ故ニ貨幣ノ價格ハ一定ノ場所、一定ノ時ニ於テハ一定スト雖モ場所ヲ異ニ

シテ同シウセサルニ於テハ差異變動アルヲ免レス同一額ノ貨幣ニシテ其價格昨日高クシテ今日低ク甲ノ地ニ大ニシテ乙ノ地ニ小ナルコトアルモノトス而シテ彼ノ財貨ノ價格ナルモノハ貨幣ヲ以テ表示セルモノナルカ故ニ貨幣購買力ノ大小高低ハ財貨ノ價格ニ因リテ之ヲ知ルコトヲ得ルナリ

今市場ニ於テ財貨ノ價格ノ變動スル所以ヲ見ルニ其原因財貨ニ存スル場合ト貨幣ニ存スル場合トアリトス而シテ第一ノ場合ハ既ニ第二章ニ述ヘシ如ク財貨ノ需要供給ノ關係ニ依ルモノニシテ吾人カ日日目撃スル所謂物價ノ高低ナルモノハ其原因財貨ニ存スルコト多シトス然レトモ物價ノ變動ニシテ貨幣ニ基因スルコトアルハ之ニ理論ヲ照ラスモ亦之ヲ實際ニ徵スルモ爭フヘカラサル事實ニシテ此原因ヨリ生スル物價ノ變動ハ其勢力通常緩漫ニシテ世人ノ注意ヲ引クコト少ク且數多ノ財貨ニ比較シテ始メテ變動ノ程度ヲ概測シ得ルモノトス本節ニ於テ説明セントスル貨幣ノ價格ハ其變動ノ原因貨幣ニ存スルモノニ限ルナリ

貨幣ノ價格モ亦需要供給ノ關係ニ依リテ定マルモノトス例ヘハ今日ノ貨幣ノ

價格ハ今日以前ニ於ケル貨幣ノ需要額ト其流通額トノ關係ヨリ生セルモノニシテ明日ニ至リ貨幣ノ需要額ニ増加シ而シテ流通額ノ増加之ニ伴ハザルトキハ貨幣ノ價格ハ次第ニ上騰スヘク之ニ反シテ流通額増加スルモ需要額ノ増加之ニ應セザルトキハ貨幣ノ價格ハ低落ヲ來スモノトス

一國ニ於ケル貨幣ノ需要額ハ到底之ヲ精細ニ計算スルコト能ハス經濟上及ヒ其他ノ狀況ニ依リテ各國貨幣ノ需要額ヲ異ニスルノ事ナラス同一國ニ於テモ常ニ多少ノ變動ナキヲ得ザルナリ然レトモ一國ニ於ケル貨幣需要額ノ大小増減ハ左ニ述フルカ如キ原因ニ由リテ影響セララルモノトス

第一貨幣ヲ使用スル取引ノ多少ニ貨幣ヲ使用スル取引ノ多少ハ開化進歩シ分業行ハラルニ隨ヒテ増加スルモノトス例ヘハ奴隸制度廢セラレテ自由勞働之ニ代リ自産自費ノ風習衰ヘテ他人ノ生産セル財貨ヲ消費スル程度昇進スルトキハ貨幣ヲ要スルコト多キヲ致サザルヲ得ス故ニ未開國ト開化國トヲ比較セハ後者ノ貨幣需要額ハ前者ヨリモ大ニシテ地方ト都會トヲ比スルモ亦同一ノ現象ヲ見ルモノトス

第二業貨幣流通ノ遲速 苟モ一家ヲ構成シ又ハ一事業ヲ經營スル者ハ諸種ノ支拂ニ應スルカ爲メニ常ニ多少ノ貨幣ヲ自ラ保管スルモノトス所謂手許有金ナルモノ是ナリ而シテ人人カ一定ノ期間例ヘハ一箇月若クハ一箇年間ニ於テ收入及ヒ支出スル貨幣ノ合計額ハ縱令相等シキ場合ニモ貨幣出入ノ狀態ニ從ヒテ手許有金ニ大小ノ差違ヲ生スルナリ例ヘハ毎月一圓ノ貨幣ヲ得テ直チニ之ヲ消費スル職工モ一箇月ニ一回三十圓ノ俸給ヲ受領シ而シテ之ヲ一箇月ノ經費ニ充ツル官吏モ一箇月間ニ於ケル收支ノ總額ハ相同シト雖モ前者ニ於テハ手許有金一圓ヲ超ユルコトナク後者ニ於テハ手許有金一旦三十圓ニ達シテ漸次減少スルモノトス此ノ如ク貨幣ノ出入共ニ頻繁ニシテ一箇處ニ永ク停滯スルコトナキトキハ之ヲ稱シテ貨幣ノ流通迅速ナリト曰ヒ然ラサル場合ニハ名ケテ貨幣ノ流通緩慢ナリト曰フ而シテ人人ノ保管スル手許有金ノ大小ハ一國ニ於ケル貨幣需要額ニ影響ヲ及ボスモノトス即チ手許有金トシテ停滯スル貨幣多キトキハ實際支拂ニ用ヒラレル貨幣減少スルカ故ニ貨幣ノ需要額増加シ人人ノ有スル手許有金少キトキハ反對ノ結果ヲ生スルモノトス而シテ之

歸シ制裁ナキ行爲即チ道德ヲ以テ法律外ニ置キタリ然レトモ法律ト道德トノ區別ハ理論上明カニ之ヲ分畫スルハ常ニ學者ノ難ニスル所ナルニ況ヤ宗教及ヒ法律ヲ以テ同一ナル公權ノ手ニ委シタル羅馬ノ習慣後ニ在リテハ之ヲ爲スコト更ニ困難ニシテ古昔時代法律觀念ニ向ヒテ起リタル新思想中動モスレハ法律ト道德トヲ混合シタル者アルハ敢テ怪シムニ足ラス例ヘハ「セルシムス」(Ceteris)「カ下シタル法律ノ定義ニ法律ハ善良及ヒ公平ノ術ナリ」トハ恰モ法律ハ實用スヘキ規則トシテ編成サレタル善良及ヒ公平ノ理ニシテ裁判官ノ任ハ道德ノ完全ナル應用ニ在リト謂ハサルヘカラス「法律ハ古昔ノ狹隘ナル思想ハ此ノ如ク廣潤ト爲リ來リタルハジュステニア」(Justinien)「帝」イニス「チナ」(Institutiones)ノ定義ニ據リテ之ヲトスルコトヲ得今其掲クル所ヲ略述セハ左ノ如シ「法律ハ社會ノ秩序ヲ維持セシメテ社會ノ利益ヲ保護スルモノトシテ正理トハ各自ノ權利ヲ尊重スル確固タル繼續セル意思ナリト是レ「ユルピアン」(カ下セル)解義ニシテ之ヲ以テ推セハ正理ノ行爲トハ他人ニ向ヒテ毫モ妨害ヲ加ヘサル行爲ニシテ正理ノ人トハ其行爲ノ何人ノ權利ヲモ

管セサルノ意思ニ因リテ支配セラルル者ヲ謂ク而シテ、ユニテニテアン帝ヲ探リタル定義ニ據レハ此意ハ堅牢不拔ニシテ常ニ存立スルコトヲ要シ偶然ニ善ヲ爲シタルヲ以テ足レリト爲サス。蓋シテハ蓋シテハ此意ニ依リテ法律ノ本旨ハ品位ヲ保テテ生活シ何人ニモ損害ヲ加ヘス各自ニ其屬スルモノヲ歸スルニ在リ。蓋シテハトハ是レ亦ユルピアンノ定義セル所ナリ此定義ヲ觀ルニ本來法律ノ源ハ正理ヨリ取レルヲ以テ其制定スル所モ亦正理ノ欲スル所ヲ超ユルコト能ハス然レトモ品位ナキノ行爲ヲ以テ人タルノ聲譽ヲ失墜スルモ之ヲ以テ法律問題ニ付スルコト能ハサルハ明カナリ然ルニ品位ヲ保テテ生活スルコトヲ法律ノ教訓ト爲シタルハ正理ノ定義ニ於ケルト等シク法律思想ヲ誇張シタルモノニシテ寧ロ之ヲ削除シ法律ノ相互間ニ於ケル權利及ヒ其規定ヲ構成ヲ攻究スル點ノミヲ取ルヲ可トスヘキカ如シ而シテ各人相互ノ間其權利ニ損害ヲ加フヘカラサルハ消極的ノ義務ニシテ若シ其遵守セラレタルトキハ法律ノ行動ヲ喚起シ得ヘシ又各自ニ其屬スルモノヲ歸セヨトハ吾人カ社會存在ノ直接ナル結果ト

シテ服セサルヘカラサル義務ニハ非スシテ或特別ナル事實ノ結果トシテ生スル義務例ヘハ契約ニ因リテ生スル義務ヲ指スモノナリ然ラハ法律ノ定義中此二條ノ點ニ於テハ純粹ナル法律ノ範圍ニ屬スヘシ。蓋シテハ法律學トハ神事人事ノ知識及ヒ正不正ノ學ナリ。蓋シテハト若シ此文章ニシテ單ニ第二ノ句ノミナリシナラハ意義明確ナリシナルヘキモ第一ノ句ハ殆ト讀者ヲシテ其意ヲ解スルニ苦マシム。蓋シテハ之ヲ要スルニ古昔羅馬人カ抱ケル粗笨ナル法律思想ハ科學的思想ノ進歩スルニ隨ヒテ排棄セラレ法律ノ原則ヲ以テ自然法ニ籍ルニ至レリ然レトモ羅馬人固有ノ法律ハ依然トシテ存立シ羅馬人ノ間ニノミ適用セラレタルモ其除外的ノ精神ハ廣ク之ヲ應用セシムルヲ許サス而シテ外邦人トノ關係漸ク頻繁ナルニ及ヒ勢ヒ其狹隘ナル思想ヲ擴張シ更ニ其基礎ヲ公平ニ置キ内外人ノ差別ナク汎ク適用セララルヘキ法律ノ發生ヲ促スニ至レリ

第二章 法律ノ區別

(一) 法律ヲ大別シテ公法及ヒ私法ト爲ス其區別ハ公平ノ點ヲ以テ人ノ地位ト此區別ハ法律カ規定スヘキ種種ノ社會的關係ノ點ヨリ觀タルモノニシテ羅馬法律ノ既ニ明示シタル所ナリ而シテ公法ハ羅馬國ノ組織ニ關スル一切ノ規則ニシテ私法ハ私人ノ利益ニ關スル一切ノ規則ナリ近世公法ノ主眼ハ政治的的結合ト其分子タル箇人トノ關係ヲ規定スルニ在ルモ羅馬ニ於テハ之ニ異ナリ公法ハ三箇ノ事件ヨリ成ル第一ニハ「サクラ」(Sacra)即チ公認セラレタル神及ヒ之ヲ奉スル祭祀ノ儀式ニ在リ第二ニハ「サセルドラス」(Sacerdotes)即チ僧侶ノ組織其任務及ヒ特權ナリ第三ニハ「マジストラチ」(Magistratus)即チ種種ノ法官ノ數其性質任命ノ方法及ヒ各法官ノ職務ナリ而シテ元老院民會及ヒ官廳ノ組織及ヒ職權ハ第三件ノ中ニ屬ス此ノ如ク羅馬公法ハ宗教及ヒ法律ヲ混淆シタルモノニシテ歴史トシテ研究スルトキハ其價值ヲ有スルモ近世法制ノ發達ニ對シテハ殆ト影響スルコトナキカ故ニ吾人カ修ムル所ノ學問上ニハ之ヲ取りテ科目

ニ加フルコトナシ

私法ハ箇人間相互ノ關係ヲ定メ私人タルノ條件及ヒ其資産ヲ形成スル權利ヲ規定スルモノナリ而シテ此法律學ノ枝分ニ向ヒテ羅馬人ハ特異ナル才能ヲ顯ハシ私法ハ其作リタル功績中磨滅スヘカラサルモノノ第一列ニ位シ後世ノ學問ニ向ヒテ重大ナル影響ヲ與ヘタルモノナリ抑モ羅馬私法ノ意義明晰ナル秩序ノ順正ナルニ至リテハ今ニ追フマテ人ノ嘆賞スル所ニシテ之ニ冠スルニ「書シタル道理」ナル稱呼ヲ以テスルハ過大ニ陷ルノ嫌ナキニ非スト雖モ又其如何ニ學者ノ間ニ敬重セラレ千歳不磨ノ光榮ヲ荷フカヲ知ルニ足ルヘキ此羅馬法律ノ枝分ハ實ニ吾人カ研究ノ目的タル主題ニシテ順次其詳細ニ涉リテ之ヲ檢

羅馬ニ於テ此ノ如ク私法ハ發達シテ高尚ノ程度ニ進ミタルモ之ニ反シテ公法ハ全ク荒蕪ノ狀態ヲ呈シ學術的原理ノ探ルヘキモノナキハ殆ト怪訝スヘキノ觀ナキニ非スト雖モ此公法私法カ運用セラレタル羅馬社會ノ形勢ヲ以テ察スレハ其然ル所以ノ偶然ナラサルヲ知ルニ難カラズ蓋シ共和時代ヨリ私法ノ進

歩ニ於ケル法學者ノ功績ハ僅少ナラサリシカ帝政時代ニ迄ヒ法學者ノ勢力ハ直接ニ法律上ニ及ヒ之ヲ導キテ公平ノ點ニ到達セシメントシタル運行中毫モ障礙ヲ受クルコトナカリシノミナラス暴君虐主ト雖モ私法ノ發達ヲ幫助シ人民ノ不平ヲ避ケンコトヲ力メタルハ其畏ルル所ハ唯反亂ノミニ在リテ其他ノ簡人關係及ヒ所有權ノ如キ間フ所ニ非ス是故ニ此等ノ問題ハ常ニ十分ナル保護ヲ受ケ簡人一家ノ生活ハ完全ナル組織ヲ得テ公平無私ノ法律ハ羅馬人民ヲ支配シタルモ羅馬皇帝ノ威權ハ常ニ專恣ナルヲ害セス而シテ其政策ハ先ヅ一身ノ保全ニ在ルヲ以テ汲汲トシテ己ノ地位ヲ維持センコトヲノミ惟レ國リ一切ノ威權ヲ集合シテ手中ニ握リ獨杏擅斷國人ノ之ニ與ルヲ容サス人民ヲシテ單ニ私事ニ軼掌セシメ敢テ政事ニ容喙セザランカ爲メ盛ニ飲宴ヲ設ケ市人ヲ驅リテ醉飽セシメ復タ他ニ志ナカラシメンコトヲ力メシヨリ放縱淫肆ノ風俗ヲ成シ往昔共和時代ノ人民カ政治思想ノ基礎ト爲シタル國民自由ノ精神ハ地ヲ拂ヒテ消滅スルニ至レリ是レ羅馬ニ於テ公私兩法ノ全ク相反セル境遇ニシテ其結果モ亦宵壤ノ差アル所以ナリ

(二) 適用區域ニ從ヒ法律ヲ細別シテ市民法、通民法、自然法ト爲ス又ハ各人民固有ノ風俗習慣ニ從ヒテ制定シ一人民ヨリ他人民ニ移ルヲ以テ變スル所ノ法律アリ而シテ羅馬人カ特ニ自國ノ爲メニ設立シタル此種ノ法律ヲ呼ビテ市民法(Civile)ト謂フ此羅馬ノ市民法ハ最モ國民的ノ精神ヨリ成リ排外的狹隘ノ法律ナリシカ羅馬人ノ其城壁ヲ出テ漸漸四方ニ向ヒテ侵略ヲ試ミ遂ニ當時存在セル人民ハ或ハ之ヲ征服シ或ハ羅馬ノ同盟ト爲シ盡スニ及ヒテ外邦人民トノ關係頻繁ト爲リ羅馬市民法ノ外更ニ内外人ノ別ナク適用セシムヘキ法律ノ必要ヲ生セリ

羅馬人ノ征服セル人民中ニハ文物制度ノ遙ニ羅馬ヨリ進歩シタルモノアリタリ殊ニ希臘ヲ以テ其最タルモノトス而シテ羅馬法官ハ希臘ニ於テ簡人ノ國際上ノ關係ニ於テ其法則ト爲リタル原理ヲ取リテ外邦人民ニ認與スルニ及ヒタリ此法律ハ形式ニ依ラスシテ内外ノ別ナク一般人民ノ爲メニ適用セラルルモノニシテ通民法又ハ萬族法(Us gentium)ト唱ヘ羅馬固有ノ法律習慣ヨリ成リ而シテ唯ヲ羅馬人民ニ限リ應用セラレタル市民法ト兩兩相對映セリ

此通民法ハ文化シタル總テノ人民ニ於テハ皆同一ニシテ國民ノ種族地理ニ從ヒテ差等アルコトナシ蓋シ此法律ハ自然ノ純理ヨリ産出シ善良正理ノ兩者ヲ以テ指導者ト爲シタル人類ノ抱クヘキ第一思想即チ自然法ヨリ成レルモノナリ而シテジュスチアン帝ハ此自然法ヲ通民法ヨリ區別シ更ニ第三種ノモノト爲シタルモ元來法律ノ一般人民ニ應用スヘキハ其自然ノ原理ニ循由スルニ在ルモノニシテ羅馬法モ亦自然法及ヒ通民法ヲ取り彼此區別スルコトナシ故ニ市民法、通民法及ヒ自然法(Jus naturale)ノ區別ハ歸スル所ニシテ自然法ヲ削除スルヲ常レリト爲ス

羅馬人民ニシテ守舊ノ精神ニ乏シカリシナラハ通民法ノ新原則カ採用セララルト共ニ固有ノ市民法ハ漸ク侵蝕セラレテ終ニ全然其狀態ヲ變セシナルヘシ然レトモ通民法ハ市民法ヲ傾倒スルコト能ハスシテ兩立シ法律思想ノ進行スルト共ニ市民法ノ頑硬ナル性質ヲ緩和ナラシメ老朽ノ儀式ヲ排棄スルニ及ヘトモ其嚴然畫定セル境界ハ永ク抗立シタリ此ノ如ク市民法及ヒ通民法ノ併存ハ羅馬法ヲ推進シテ高尚ノ域ニ進マシメタル主タル原因ナルモ又之ヲ學フノ

困難ナル一ノ原因タリ

市民法及ヒ通民法ノ存在ヒシ理由ハ略ホ已ニ説キタルカ如シト雖モ之ヲ區別スルノ特徵タルハ羅馬ノ裁判所ニシテ羅馬人民ニノミ適用スヘキ規則ハ之ヲ市民法ト爲シ裁判所ニシテ外邦人間或ハ外邦人ト羅馬人トノ關係ニ於テ適用スヘキ規則ハ通民法ニ屬ス故ニ外邦人ニシテ羅馬市民法ノ方式ニ從ヒテ爲セル遺言ハ羅馬裁判廷ニ於テ實行ヲ許サス之ニ反シテ羅馬人ハ外國人ト加盟セル會社契約ハ羅馬法律ニ依リ其有效ナルヲ認ム是レ羅馬法文ノ市民法及ヒ通民法ナル二箇ノ稱號カ意味スル眞成ナル解釋ヲ示ス所ナリ

(二) 法律ノ形成ニ從ヒ私法ヲ區別シテ不文法及ヒ成文法ト爲ス

羅馬ノ學者ハ法律形成ノ點ヨリ觀察ヲ下シ法律ヲ分チテ不文法(Jus non scriptum)及ヒ成文法(Jus scriptum)ノ區別ヲ立テシカ此名稱ハ字義上正確ナラス蓋シ法律ノ文章ヲ成シタルト否トハ此區別ヲ識別スル表徴トスルニ足ラザルナリ不文法トハ立法者ニ由リ制定セラレ布告セラレタル法律ニ非ス唯引用ノ久シキヨリ社會關係上ノ規則トシテ人民ヨリ承認セラレタル制度及ヒ原則ノ總體ニ

シテ所謂習慣法ナルモノナリ元來習慣法ハ布告セラレタルモノトナキヲ以テ其何レノ時ヨリ法律タル效力ヲ生セシヤハ精密ニ之ヲ判斷スルコト能ハス其漸次應用ヲ重キ終ニ社會一般ヨリ法律トシテ認定セラルルニ至ルマテハ既ニ多少長キ間ノ年月ヲ經過セルヤ明カナリ不文法ノ存立スル原因ハ人民カ一般ニ法律ノ必要ヲ感シ其存在ヲ希望スルニ由ルモノニシテ其司法的關係ニ於テハ漸次發達シテ形成セラルルヲ以テ社會ノ必要ヲ趁ヒ又社會ノ進步發達ニ隨ヒテ變遷スルモノナリ此習慣法ノ變化スヘキ性質ハ能ク法律ノ哲學的理想ノ精神ニ合スルモ又同時ニ習慣法ノ法律トシテ不全ノ性質ヲ帶フル所以ナリ何トナレハ之ヲ適用スルニ當リ其境界明確ニ限畫スヘカラサルヲ以テ法官ハ自己ノ意思又ハ記憶ヲ基礎トシ訴訟ノ判決ヲ下スニ至リ箇人ノ權利財產問題等ニ對シテ危險ナル結果ヲ惹起スルコトアレハナリ此等ノ弊失ヲ回避シ得ヘキハ明文法ニシテ明文法トハ其文章ヲ成シタルノ謂ニ非スシテ立法上ノ形式ヨリ之ヲ指稱スルモノナリ

一國又ハ一人民ニシテ法律思想ノ少シク精密ト爲リ理論ノ漸ク形成セラルル

ニ至ルトキハ若シ確立シタル方法ヲ以テ組織セラレタル立法權ナルモノノ存スルアラシカ此立法權ハ必スシモ習慣ノ成立スルヲ待タスシテ自ラ進ミテ人民ノ全體或ハ少クトモ其多數ノ希望ヲ取リテ之ヲ正確ナラシメ一定ノ方式ニ適合シ之ヲ條文ト爲シ公布シテ法律ト爲スヲ常トス是ヲ以テ觀レハ習慣ハ幼稚ナル人民ノ間ニ於テハ法律ヲ構成スルモ開化ノ或程度ニ達シタル人民ニ至リテハ寧ロ法律ハ習慣ヲ構成セシメ之ヲ發達スト謂フヘシ

羅馬ニ於テモ其他ノ人民ニ於ケルト同シク當初不文法ハ單ニ習慣ヨリ成立シタリ然レトモ成文法ハ國ニ依リ又時代ニ隨ヒ其制定ノ方法及ヒ其規定セル趣旨ヲ異ニスルモノニシテ羅馬ニ於テハ左ニ列記セル六種ノ法律ヲ以テ成文法ノ源泉ト爲ス

- (一) 「キュリア」(Curia)及「センチュリア」(Centuria)民會ノ決議
- (二) 「トリビュ」(Tribus)民會ノ決議
- (三) 元老院決議
- (四) 皇帝ノ勅令

- (五) 法律學者ノ答案
- (六) 法官ノ訓示

第三章 法律ノ源泉及ヒ發達

法律ノ源泉ヲ探求シ其如何ニシテ形體ヲ付與セラレタルヤ又如何ナル時代ニ於テ成立シタルヤヲ研究スル之ヲ法律ノ外部歴史ト謂フ換言スレハ法律ノ外部歴史トハ法律ノ外表ニ付キ觀察シタルモノニシテ其形體及ヒ生活ヲ付與シタル有形的作用ノミヲ學フモノナリ之ニ反シテ法律ノ内部歴史トハ司法制度ノ原則及ヒ適用等ニ關シ之ヲ分解シ其進行ヲ詮ヒテ學理ノ在リシ所ヲ精査スルモノナリ前者ハ公法史ノ一部ニ屬シ後者ハ私法史ノ全部ヲ成ス而シテ立法上ノ動機ハ私法上ノ方針ニ向ヒテ直接ナル勢力ヲ波及スルヲ以テ先ツ法律ノ源泉ヲ知ルコトヲ要ス今順次時代ニ從ヒテ法律ノ外部歴史ヲ略述センニ分チテ五世代ト爲ス

第一世代 羅馬創立ヨリ十二銅版法又ハ十二表法ニ至ル即チ羅馬曆第一年ヨ

リ三百五年ニ至ルノ間羅馬曆第一年ハ耶蘇紀元前七百五十四年ナリ此時代ヲ稱シテ法律ノ幼稚時代ト謂フ

羅馬市開創ノ起源ハ「チーブル」(Thebes)「ロ」(Roma)「タル」(Tarracina)地方ノ一隅ニ住居セルラムネス(Bramnes)人「タシネス」(Tatani)人及ヒ「リキネス」(Lucanians)人ナル三部落ノ人民カ相合シテ一ノ市街ヲ造リ之ヲ圍繞スルニ城壁ヲ以テシタルニ在リ此三種族ノ人民ハ羅馬市内ニ於テ各十箇ノ「キネリア」(Curia)選舉區ノ種類ニ小分セラレ又貴族平民ノ二階級ニ區別セラレ平民ハ貴族ニ隸屬セシメラレタルモ其關係ノ如何ナルモノナリシヤハ今日分明ナラス

羅馬ヲ支配セル公權ハ一人ノ王及ヒ元老院ヨリ成リ王位ハ世襲ニ非スシテ元老院議員ノ一人カ王位ニ上ルヘキ者ノ名ヲ發議シ「キネリヤ」民會ノ決議ニ付シ選任セラレ羅馬王ノ權力ハ絶對ニシテ終身其職ニ在リ平時ニ於テハ政務ヲ管理シ宗教上ノ首宰トシテ其儀式ヲ司リ法官トシテ民事及ヒ刑事上ノ訴訟ヲ裁斷ス戰時ニ於テハ人民ヨリ編成セラレタル軍隊ヲ指揮シ自ラ戰場ニ臨ムモノナリ元老院ハ羅馬市ノ古老ヲ以テ組織セラレ當初元老院議員ノ數ハ百人ナリ

シカ後増加シテ三百人ト爲レリ元老院ノ任務ハ王ノ諮詢ニ答フルニ在リ緊要ナル國務ハ必ス元老院ノ評議ヲ經サルヘカラサルモ王ハ其意見ニ拘束セラルルコトナク國事ヲ處斷スルニ當リ之カ採否ノ自由ヲ有セリ羅馬王ノ權力ハ殆ト無限ナリシモ法律ノ制定ニ至リテハ己ノ獨裁ヲ以テ之ヲ爲スコト能ハス必ス先ツ人民ノ代表者ヲ召集シテ「キユリア」民會ヲ開キ法律案ヲ諮問ス民會ハ之ニ對シ討論スルノ權ナク唯法律案ノ可否ヲ決スルノミ民會ノ可決セシ法律案ハ更ニ元老院ノ認可ヲ得テ始メテ法律ト爲ル此形式ヲ經テ成立シタル法律ハ所謂「キユリア」法ナルモノニシテ習慣ニ次キテ表ハレ明文法ノ最モ古キモノナリ「キユリア」民會ノ決議ニ於テ外見上貴族平民同等ノ權利ヲ有セシカ如キモ實際ニ於テハ全ク之ニ反シ人民中ノ少數タル貴族ハ多數タル平民ヲ壓倒シテ會議以外ニ之ヲ排除シタルカ然ラサレハ平民ノ會議ニ列スルヤ貴族ノ隸從タル名義ヲ以テシ主從ノ關係ヨリ生スル義務トシテ一ニ貴族ノ意ヲ奉シテ投票セサルヘカラサリシカ如シ又古代羅馬ノ習慣トシテ民會ノ召集其他重大ナル國事ヲ決行スルニ先テ犧牲ヲ神ニ捧ケ神意ノ好惡ヲ卜占セシカ其祭式ヲ司ル

ハ國王ニシテ國王ハ元老院ノ推舉ニ依リ選任セラレ又此至重ノ權力ヲ有スル元老院ハ貴族ヨリ組織セラレ加フルニ「キユリア」民會ノ可決セル法律案ヲ認可スルモ亦元老院ノ職權ニ屬シタルヲ以テ立法上貴族ノ勢力カ獨リ之ヲ占斷シ毫モ平民ノ勢力ノ及ハサリシハ疑ヲ容レズ

羅馬王「セルウィウス、テュリウス」(Servius Tullius)(紀元前五百七十八年乃至五百三十四年)時ニ至リ新ニ人民ノ區別ヲ立テ其年齡及ヒ資産ノ多寡ニ依リ五階級ヲ作り別ニ貧民ヲ集メテ一階級ヲ設ケ合計六級ト爲シ更ニ之ヲ細別シテ百九十三ノ「センチュリア」ト爲シ財政軍事及ヒ立法組織ノ基礎ト爲シタリ財政上ニ於テハ此細別ニ從ヒ租稅分賦ノ標準ヲ立テ軍事上ニ於テハ各「センチュリア」ノ中ニ壯老兩者ヲ分チ壯者ハ十六歳以上四十六歳マテニシテ之ヲ壯兵トシ國外ノ戰闘員ニ充テ老者ハ四十六歳以上ノ者ニシテ羅馬内ノ防護兵ト爲シタリ立法上ニ於テハ「センチュリア」民會ヲ作り此民會ニ於テ可決シタル法律ヲ名ケテ「センチュリア」法ト曰ヘリ即チ明文法第二ノ源泉ナリ「セルウィウス」ハ五階級ニ別タレタル市民ノ資産ハ第一級ヲ作ルモノハ十萬「アス」ニ「アス」ハ銅錢

ノ名ニシテ「アス」ハ我ニ錢許ヲ價之以上第二級ヲ作ルモノハ七萬五千アス以上第三級ヲ作ルモノハ五萬アス以上第四級ヲ作ルモノハ二萬五千アス以上第五級ヲ作ルモノハ一萬二千五百アス以上トス。羅馬王セルウイユス、テリユス「民會組織ヲ變更シ財產的ノ門閥ヲ取りテ出生的ノ門閥ニ代ヘ富者ノ勢力ヲ籍リテ貴族ノ勢力ヲ抑制セント計畫シタルモ此時代ニ於テ著大ナル財產ヲ有シタル者ハ多ク貴族ニシテ平民中ニハ其數僅少ナリシカ故ニ得タル結果ハ外表ニ止マリタルニ過キス其他當時羅馬ノ人口ハ著シク増殖セントスルノ傾向アリ此等貧困ナル市民ハ保守的精神ナク動モスレハ既存ノ制度ヲ破壞セントスルノ懼レアルヲ以テ大多數ヲ爲シタル貧民ニ向ヒテ精細ナル注意ヲ加ヘ其勢力ヲ得ルコトヲ防止セシメテ「センチュリア」民會組織第二ノ目的ト爲シタル如シ。

「センチュリア」民會ヲ召集スルニハ之ヲ允許スル元老院ノ決議ヲ要シ其可決シタル法律ハ古昔時代ニ於テハ更ニ「キュリア」民會ノ認可ヲ要シタリ「センチュリア」民會ノ議長ニハ元老院議員ヲ以テ之ニ充テ開會ノ場所ハ演武場ニ於テシ決

シテ開市ノ日ヲ以テスルコトヲ得ストシ平民ヨリ成レル農夫ノ會議ニ群集シ來ルヲ避ケタリ。[センチュリア]間ノ投票ニハ「センチュリア」ヲ以テ一票トシ各「センチュリア」内ノ投票ハ其有スル頭數ニ依リ多數ヲ定ム「センチュリア」ノ投票ハ第一級市民ヨリ始マリ可否ノ多數ヲ得ルニ及ヘハ之ヲ繼續セサルモノトス第一級ヲ組成スル市民ノ數ハ僅少ナルモ百九十三「センチュリア」中八十ヲ有シ通常第二級市民ノ投票ニ及ヘハ可否已ニ決シ第三級以下ノ市民ヨリ成ル「センチュリア」ハ投票ニ與ルコトナカリシヲ以テ「センチュリア」ノ組織ハ獨リ富豪ノ勢力ヲ擅ニセシメ貧民ヲ驅逐シテ公事ニ關與スルヲ許サザリシ。

「セルウイユス、テリユス」王ハ「センチュリア」組織ノ運用ニ便ナラシメンカ爲メ每五年ヲ以テ人口及ヒ資産ノ調査ヲ行ハシメ若シ戸主ニシテ家族及ヒ收入ノ申告ヲ怠ル者ハ嚴罰ヲ以テ之ヲ處シタリ其他「セルウイユス、テリユス」王ハ羅馬ノ境土ヲ分チ羅馬市ヲ以テ四區「*Quarta*」ト爲シ田野ヲ以テ三十一區ヲ作りタリト云フ然レトモ田野ノ區分ハ其眞ニ「セルウイユス、テリユス」ノ時ニ成リタルヤ明

確ナラスイテ田賦ノ徵收ハ其具ニシテ上ノ人ニシテ之ヲ納ムル者トシテ其ノ利ハ革命ノ後ニ於テ貴族ノ手ニ歸スルコトヲ恐ルル者トシテ革命ノ前五百十年ノ革命ニ因リ羅馬ノ王政ハ倒レテ共和ト爲リタルカ此革命ハ素ト貴族カ起シタル反亂ノ結果ナルヲ以テ革命ヨリ生スル利益モ亦貴族ノ壟斷スル所ト爲リ平民ハ殆ト其餘澤ヲ蒙ルコト能ハス依然トシテ貴族ノ使役ニ供セラレ政治及ヒ宗教上ノ權利總テ皆貴族ノ手中ニ保留セラレ就中最モ平民ヲシテ悲酸ナル痛苦ヲ感セシメタルハ革命戰爭ヨリ生シタル負債ニシテ古昔羅馬ノ習慣トシテ戰爭時ノ武器食糧等總テ兵士各自ノ負擔タリ平民モ亦革命戰爭ニ從事シタルモ多クハ貧困ニシテ武器ヲ購フノ資力ナク僅ニ負債ニ依リ必要ナル金錢ヲ得タルカ一旦戰爭ノ終ルニ及ヒテ法外ナル利息ヲ加ヘ元資ヲ返償セサルヘカラサルニ至リ債權者ノ酷烈ナル期ヲ過キテ辨濟スルコトヲ誤リタル者ヲ捕ヘテ奴隸トシ或ハ殺シテ肉ヲ分チタリ是ニ於テ平民ハ意ヲ決シテ別ニ安全ノ地ニ移ラント欲シ群ヲ爲シテ羅馬ノ市ヲ去リタルヲ以テ貴族ハ大ニ驚キ將來平民ヲ保護スヘキ「トリボン」(Tribun)ナル特別ナル法官ヲ創設シ「通債」ノ爲メニ奴隸ト爲シタル者ハ之ヲ放釋シ又返償シ能ハサル負債者ハ之

ヲ免除スヘキコトヲ約シ僅ニ平民ノ羅馬ニ復歸スルコトヲ得タリ此「トリボン」ナル法官ハ最初「センテニア」會議ニ於テ選任セラレタリシカ後「トリビエ」會議(平民會議)ヨリ選出セラレタリ此法官ハ身ニ特別ナル衣服徽章等ヲ著ケスト雖モ其威權ハ諸種ノ法官中最モ強大ナルモノニシテ「トリボン」ノ身體ハ侵スヘカラサルモノト定メラレ又一言シテ元老院決議及ヒ其他ノ法律法官ノ命令ヲ中止セシムルノ權能ヲ有セリ之ヲ「ウエト」(Veto)ノ權ト謂フ其他「トリボン」ハ平民會議ヲ召集シ其議決ヲ取ルノ權アリ此決議ハ「プレビエ」(Prae-sens)ト呼ハレ平民會議創立ノ當時ハ單ニ平民ニ對シテノミ有效ナリシカ後一般人民即チ貴族平民ノ別ナク等シク遵守セサルヘカラサル效力ヲ有スルニ至レリ是ヨリ以後平民ノ勢力ハ漸次擴張セラレ紀元前四百五十年私法上貴族ト同等ノ權利ヲ得終ニ紀元前三百六十六年政治上同等ノ權利ヲ得タリ「プレビエ」會議ハ紀元前十二銅版ノ法律ハ羅馬人民ノ私權及ヒ政治上權利ノ根本ヲ定メタルモノニシテ法律上人民ノ階級ナク又區別ナキコトヲ示シ羅馬人民カ國ノ主權者タルヲ知ラシメタリ然レトモ實際上尙ホ久シキノ間平民ハ貴族ト對等ノ地位ヲ

立ツコト能ハサリキ十二版ノ法律ハ羅馬ニ存在セル固有ノ習慣ニ混スルニ伊太利地方ニ起リタル希臘殖民地ノ習慣ヲ以テセルモノニシテ初メ羅馬ニ於テ明文法律ヲ作ルコトヲ決スルヤ三名ノ委員ヲ命シ之ヲ當時希臘文明ノ中心タル「アラース」府ニ遣送シ其法律及ヒ習慣等ヲ審査セシメ委員ノ羅馬ニ歸ルニ及ヒ更ニ十名ノ法官ヲ選ヒ法律編纂ノ任ヲ掌ラシメ之ニ付與スルニ無限ノ權力ヲ以テシ羅馬ニ存在セル一切ノ法官ハ總テ之ヲ中止シタリ此「デセムウイリ」(Decevirii)ナル十人法官ハ羅馬ニ於テ法律ニ通曉シタル者ハ唯リ貴族ノミナリトノ口實ヲ以テ悉ク貴族ヨリ選任セラレ平民ハ一人タリトモ其員ニ加ハルコトヲ得サリシカ故ニ司法上ノ改革ハ殆ト行ハルルコト能ハサリキ十人法官ハ滿一箇年ノ後十版ノ法律ヲ作リタルヲ以テ之ヲ公事ノ會議場トシテ人民ノ集會スル「フォロム」(Forum)ニ揭示シ人民ノ意見ヲ聽キテ修正シタル後「センチュリア」會議ニ付シテ可決シタリ然レトモ此新法律ハ尙ホ未タ完備セサルノ點アルヲ以テ更ニ一箇年間十人法官ヲ任命シ二版ノ法律ヲ作ラシメ之ヲ十二銅版ニ彫刻シテ人民ニ公知セシメタリ是レ其名稱アル所以ナリ十二版法律ノ條文ハ

粗暴ニ度ルモノナキニ非ス後世改修ヲ受ケタルモ其本體ニ於テハ羅馬滅亡ニ至ルマテ破壊セラルルコトナク之ヲ以テ民法ノ基礎ト爲シタリ十二銅版ノ法律ハ羅馬ノ戰亂ヲ經テ消滅シ世ニ傳ハラス今日書上ニ記載セララルモノハ主トシテ第十七世紀ノ頃「ジャックゴットフロア」(Jacques Godefroy)カ其斷片ヲ集綴シ世ニ公ニシタルモノニ據ルモノナリ

第二世代 十二版法ヨリシセロンニ至ル羅馬曆三百五年ヨリ六百五十年ニ至ル此時代ヲ稱シテ法律ノ少年時代ト謂フ

平民會議ノ決議カ普通法ト爲ルニ及ヒ貴族モ亦平民會議ニ列席スルニ至リタリ元來トリビュ(區)ノ組織ハ人民ノ居住セル區域ニ依リテ立テタルカ「センソール」(Censor)ナル人口財産ノ調査及ヒ風俗ノ監察ヲ司ル法官ハ隨意ニ區ヲ組成シ住處ニ關セス人民ヲ各區ニ配付スルノ權ヲ有シタルヲ利用シ土地所有者ヲ以テ田野ノ三十一區ヲ作り都市ノ四區ニ集ムルニ貧者及ヒ解放奴隸ヲ以テシタルヨリ平民會議ニ於ケル貴族ノ勢力ハ彼ノ「キュリア」及ヒ「センチュリア」會議ニ於ケル如ク偏重ナラントセシモ平民勢力ノ増加ハ之カ爲メ防止スルコト能ハ

ス貴族獨占ノ官職モ亦漸次平民ヲ以テ之ヲ任スルニ至リ紀元前三百六十八年
始メテ平民ノ大統領ヲ出シタリ然レトモ貴族ハ平民ノ大統領ニ付與スルニ全
權ヲ以テスルコトヲ忌ミ其選任セラルルニ先テ大統領ノ職權中ヨリ司法權ヲ
割キテ之ヲ分立セシメ別ニ「プレトル」(Praetor)ナル法官ヲ置キタルカ此法官ノ創
設ハ將來法律ノ發達ニ向ヒテ偉大ナル影響ヲ與ヘタリ蓋シテ「プレトル」ノ發達
此世代ノ末ニ近ツキ法律ハ純然タル一科ノ學問トシテ現出シ紀元前三百四年
「クワイニウス、フラウイウス」(Quintus Flavius)ハ貴族カ自家ノ秘密トシ傳ヘ來リタル訴
訟法ヲ世ニ公ニシ又平民ニシテ始メテ大僧官ノ位ニ上リタル「チベリウス、コロ
ンカニウス」(Tiberius Coruncanius)法律學ノ教授ニ從事シセタスチニス、エリニウス」
(Sextus Aelius)ハ法律ノ彙集ヲ著セリ此等ノ法學者カ成シタル功績ハ當時羅馬ニ
傳播シ來リタル希臘哲學ノ原理ト相須チテ羅馬人ノ觀想ヲ變更シ法律ハ稍ヤ
粗野ノ性質ヲ去リ緩和ノ氣風ヲ取り羅馬ノ征服シタル人民ニ向ヒテ其應用ヲ
容易ナラシメタリ「アレキサンデル、セウエリウス」(Alexander Severus)帝ニ至ル
第三世代「シセロン」ヨリ「アレキサンデル、セウエリウス」(Alexander Severus)帝ニ至ル

紀元前百四年ヨリ紀元後二百三十五年ニ至ル此時代ヲ稱シテ法律ノ壯年時代
又ハ教科時代ト謂フ「オクタウィウス、オクタウィウス」
共和政治ノ終ニ至リ數十年來繼續シタル國內ノ爭亂ハ遂ニ其滅亡ヲ招キ「オク
タウィウス、オクタウィウス」ハ之ヲ顛覆シテ帝位ニ即キ諸般ノ法官ニ屬シタル威權ヲ攬
リテ一身ニ集メ自ラ歸スルニ無限ノ權力ヲ以テシタルヨリ人民ハ立法權ニ參
與スルノ能力ヲ失ヒ民會ノ決議ヨリ成リタル法律ハ元老院決議ヲ以テ之ニ代
ヘタリ帝政ノ初ニ於テハ仍ホ全然共和時代ノ制度ヲ破壞セズ元老院ノ如キ皇
帝ハ其名ヲ籍リテ法令ヲ發セシモ元老院議員ノ任命ハ皇帝ノ指示ニ依リテ爲
サレタルカ故ニ元老院ハ皇帝ノ意ニ從順ナル一ノ機關ト爲リ其發案ヲ公認ス
ルニ過キス皇帝カ自ラ爲ス所ノ投票ハ元老院ノ取ルヘキ方向ヲ示スモノト爲
リシカ後世ニ追ヒテハ皇帝ハ元老院ヲ經由スルノ煩ヲ廢シ自ラ勅令ヲ發シ之
ヲ法律ト爲シタリ是レ皇帝ハ無上無限ノ威權ヲ有シ獨リ法律以外ニ立チ臣民
ノ身財、財產ニ對シ主公タリ又最高法官トシテ命令ヲ下スノ權ヲ握有スルニ由
ル皇帝ノ勅令ハ已ニ帝政ノ初ヨリ存在スルモ「ジュスチニアン」帝ノ法典ニハ「アト

ロヤニクス(Adrianus)帝以前ニ上ルモノヲ載セス

皇帝ノ勅令(Constitutiones principum)ニ數種ノ別アリ

(1) 「エヂクタク」(Edicta)トハ法律上ノ問題ニ對シ將來一般ニ向ヒテ規定スル條文ナリ

(2) 「マンダタ」(Mandata)ハ一官吏ニ宛テ其取ルヘキ方針ヲ指示シタル訓令ニシテ純粹ナル政治的ノ性質ヲ有シ其私法上ニ度ルハ例外ニ屬ス故ニジュネチニアン法典ハ之ヲ載セス

(3) 「レスクリプタ」(Rescripta)ハ法官裁判官加之一箇人カ或法律上明白ナラザル疑問ニ關シ其解釋ヲ皇帝ニ請ヒタルトキ之ニ對シテ下シタル答案ナリ

(4) 「デクレタ」(Decreta)ハ皇帝カ終審裁判官タル資格ヲ以テ下シタル判決ナリ
羅馬帝政ノ末法律學ノ衰頹セル時代ニハ皇帝ノ勅令ハ明文法ノ唯一ナル源泉ト爲リ特ニ *Ieges* (レジエス)ナル字ヲ用ヒテ之ヲ指シ法學者ノ議論解釋ニハ別ニ *Jura* (ジュラ)ナル字ヲ用ヒテ之ヲ區別セリ

羅馬ニ於テ法律ノ教科時代ノ隆盛ナルヲ致シタルハ主トシテ法律家ノ功績ニ

報 雜

○講師招聘 本校第二學年級擔任講師法學士田代律雄氏及ヒ第一學年級擔任講師法學士中山成太郎氏辭任ニ付キ其後任トシテ東京大學大學院學生法學士杉山直治郎氏及ヒ大審院判事法學士横田秀雄氏ヲ招聘シ又特別法講義擔任講師法學博士仁井田益太郎氏及ヒ同法學士松岡義正氏辭任ニ付キ其後任トシテ京都大學大學院學生法學士岡八氏及ヒ東京地方裁判所判事法學士山脇貞夫氏ヲ招聘シ岡學士ハ軌遠吏規則ノ講義ヲ、山脇學士ハ公證人規則ノ講義ヲ擔任セラルルコトト爲レリ

○海牙常設仲裁裁判所初頭ノ判決 千九百二年五月二十二日華盛頓ニ於テ調印セラレタル米墨仲裁條約ニ依リ海牙常設仲裁裁判所ノ裁判ニ付セラレタル北米合衆國對墨西哥其共和國間ニ於ケルカリフォルニア等領年賦金請求事件ハ米國大統領ノ選定ニ係ル英國前控訴訟院判事樞密院顧問官常設仲裁裁判所判事法學博士エドワード・フライ氏露國樞密顧問官外務大臣秘書官佛國學士會員常設

仲裁裁判所判事法學博士「マルテン」氏及ヒ墨國大統領ノ選定ニ係ル和蘭國顧問官前「アムステルダム」大學教授常設仲裁裁判所判事法學博士「ラニム、セ、アラ、セル」氏、和蘭國前內務大臣前「アムステルダム」大學教授國會下院議員常設仲裁裁判所判事「ル、ジョレキ、ア、ア、エフ、ド、サグ、オル、カン、ロー、マン」氏ハ同年九月一日海牙ニ會合シ「コンベンハーグ」大學教授大審院評定官「ランド、ド、スタング」所長常設仲裁裁判所判事法學博士「ヘンニン、グ、マツ、ユン」氏ヲ上級仲裁裁判官兼仲裁裁判所裁判長ニ選舉シ同年十月十四日全員ノ一致ヲ以テ「桑港大僧正及ヒモントレ」僧正ノ爲メニ合衆國政府カ墨國政府ニ爲シタル要求ハ千八百七十五年十一月十一日「千八百七十六年十月二十四日修正エドワード、トルント」ノ言渡シタル判決ニ依リ「レー、ス、ヂ、ユ、カ、タ」ノ原則ニ從ヒテ處理スヘシ「本判決ヲ遵奉シ墨西其政府ハ合衆國政府ニ墨西其法貨ヲ以テ一、四二〇、六八二弗六七仙ヲ千九百二年五月二十二日ノ華盛頓條約第十條ニ規定セル期限内ニ支拂フヘシ一、四二〇、六八二弗六七仙ハ期限到來シタルニ未タ墨西其共和國政府カ支拂ハサル年金ノ全部トス即チ一年四三、〇五〇弗九九仙トシ千八百六十九年二月二日乃

至千九百二年二月二日マテノ年金トス「墨西其共和國政府ハ千九百三年二月二日ヨリ爾後毎年二月二日ニ永久四三、〇五〇弗九九仙ヲ墨西其法貨ヲ以テ支拂フヘシト言渡シタリ

○戰時禁制品ニ關スル訓令 日露交戰中戰時禁制品ト爲スヘキモノトシテ海軍大臣ハ左ノ訓令ヲ發セリ

海軍省訓令第一號

日露交戰中戰時禁制品トナスヘキモノ左ノ通定ム
 第一 左ニ掲クル物品ハ敵地ヲ經由シ若ハ之ニ到達スヘキ場合又ハ敵ノ陸海軍ニ到達スヘキ場合ニ於テ之ヲ戰時禁制品トス

兵器彈藥爆發物並其ノ材料(鉛、硝石、硫黃等ヲモ包含ス)及製造機械、セメソト、陸海軍軍人ノ制服及武裝具、甲鐵板艦船ノ製造及修裝ノ材料並以上ノ物品ニ屬セスト雖單ニ戰爭ノ用ニ供スヘキ一切ノ物品

第二 左ニ掲クル物品ハ敵ノ陸海軍ニ到達スヘキ場合又ハ敵地ニ到達スルモノニシテ其ノ到達地ノ如何ニ依リ敵ノ陸海軍用ニ供スルモノト認ムヘ

キ場合ニ限リ之ヲ戰時禁制品トス
糧食飲用品馬匹馬具馬糧車輛石炭木材通貨金銀塊並電信電話及鐵道建設ノ材料

第三 前二項ニ掲ケタル物品中其ノ分量及性質ニ依リ特ニ當該船舶ノ自用ニ供スルコト明ナリト認ムヘキモノハ之ヲ戰時禁制品ト爲スノ限ニ在ラズ

明治三十七年二月十日 海軍大臣 男爵 山本權兵衛 閣下

○懸賞討論會問題 來ル二十八日本校ニ於テ開會スル懸賞討論會ノ問題左ノ如シ

債權ノ履行ヲ妨タル行爲ハ不法行爲トナルヤ否ヤ松本學士出題

積極主論者 校友 關 敬 輔
消極主論者 校友 關 敬 輔

法政大學廣告

○專門部 正科生別科生共缺員アリ臨時入學ヲ許ス

○高等研究科 臨時入學ヲ許ス

○聽講生 臨時入學ヲ許ス

○校外生 臨時入學ヲ許ス

○特別法講義錄 毎月一回發行月謝金拾五錢

本大學ノ創刊ニ係ル講義錄ニシテ其科目ハ府縣制、郡制、市制、町村制、現行租稅法論、戶籍法、不動産登記法、供託法、非訟事件手續法、人事訴訟手續法、說賣法、特許法、意匠法、商標法、著作權法、公證人規則、軌達吏規則トス

○法學志林 梅博士每號執筆

毎月一回發行本大學講師其他專門家ノ論說及纂論、質疑ノ解答、寄書、散錄、漫評、判例、雜報、記事等ヲ掲載シテ法家ノ參考資料トス

三十七年二月 司法省指定 文部省認定 立 法政大學

法學志林

第五十三號目次 (二月十五日發行)

一部定價金十三圓 郵稅一錢
十部定價金一百一十圓 郵稅一錢
校費、法務、共計一錢十部前金郵
稅共一圓

志林

- 宣戰 法學博士 中村 進午
- 軍實ノ性質ヲ論ス 法學士 上杉 愷吉
- 大審院ノ失職事件 辯護士 信岡雄四郎
- 最近判例批評(其十七) 法學博士 梅謙次郎
- 民法第七百九十一條ノ解釋ニ關シ憲方說者ニ答フ 法學博士 梅謙次郎

纂論

- 舊國新形法(三) 法科大學生 佐竹 三吾
- 通押ノ爲メ供託シタル保證金ニ對スル債務者ノ有スル權利 法學士 松岡 義正

解疑

- 日本銀行ノ利率ハ市場利率ヨリ低ク歐洲諸國中央銀行ノ利率ハ市場利率ヨリ高ク理由 法學士 山崎覺次郎

散錄

- 追徴金ノ性質 法學士 谷野 楢
- 大審院新判決例 十二件 公平 概史

其他雜報、記事等

- 發行所 司法部指定 私立法政大學
- 文部省認定

明治三十七年二月二十日印刷
明治三十七年二月廿三日發行 (定價金貳拾錢)

編輯者 萩原敬之
發行者 東京市牛込區牛込北町三番地

印刷者 小宮山信好
東京市牛込區矢來町三番地

印刷所 金子活版所
東京市芝區西ノ久保明秀町十一番地

發行所 司法部指定 私立法政大學
東京市麴町區富士見町六丁目十六番地
(電話番町百七十四番)

(明治三十六年十月十二日第三種郵便物認可)
每月十四日、十五日、十八日、廿一日、廿五日、廿八日發行